無題

ああああ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無題

【Ｎコード】
Ｎ２４０９Ｉ

【作者名】
あああああ

【あらすじ】
結局のところ、僕らが過ごしている日々なんて名前の付けようのない、普遍的なものなんだ。僕が彼女と出会ったといってもその後の変化といったら女の子の友達が増えただけだ。プラスよりマイナスの方がでかいよ彼女と出会ってからは。ああ、ホントに吐き気がする。

無印（前書き）

発投稿です！緊張してます。駄文を散らしただけじゃねーか！と言われても何の反論も出来ません！こんな私ですがよろしくお願いします。

無印

「あなたは何？」
ただ何の変哲もないいつもの学校。部活に入ってない僕はさっきまで友達と教室で談笑していたが、友達は部活があるためもう教室を出ていってしまった。
「あなたは誰と喋っているの？」
僕もそろそろ帰ることにしてカバンに荷物をつめる。思い返してみれば充実しているようで、物足りないようで、大切なようで、空虚だったようで。言ってみれば、当たり障りのない、何の変哲もない、そんないつも通りが終わる、その直前。
「あなたは何を見ているの？」
彼女は現れた。長くて黒い髪。端整な顔立ち。透き通るような白い肌。しかし何よりも、彼女の雰囲気が印象的だった。彼女を構成するすべての要素が自己主張を拒否しているかのような何ともいえない空気感。
「あなたはどこにいるの？」
僕は彼女に魅入った。別に容姿がどうというわけではなく、ただふいに、何となく、虚心に、何の感慨も、何の感想も、何の感傷もなしに、ただ彼女に魅入っていた。
「あなたはあなた。」
僕が呆然としていると、彼女は僕に聞いてきた。それは質問というには彼女は僕に答えてほしいわけでは無さそうだし、尋問にしてはあまりにも威圧感とか、少なくとも脅迫めいてはいなかった。
「あなたはあなた自身としか喋れない。」
聞いてくる彼女からは本当に何も感じられなかった。それは感情だけではなく、そもそもそこにいるという存在感も無いかのような、そんな虚ろで儚げで繊細で脆い彼女。
「あなたが見ているのはあなた自身。」

しかし彼女から放たれる言葉はあまりにも強かった。その一言一言が確実に僕の精神をえぐっていく。今の僕にはとても受けきれない、強くて固くて難いことば。使われる単語はとても素朴で、単純明快な内容。だからこそ誰にでも意味が通じる。通じてしまう。こんな僕なんかにも。

「あなたがいる場所はあなたがいると思っている場所」

ただただ鮮明に、単純に、明快に、簡単に、僕は理解する。再認識する。僕という存在を。聞きたくない、分かりたくない、認識したくない僕という存在の本質を。さっきまでの今日という日の認識を改めることにする。今日は間違いなく最悪な日だ。今までのいつも通りはこの瞬間に間違いなくひびがはいったろう。そして今日で終わりではないと思う。僕と彼女はたった一日でその関係を断ち切れるような簡単なものではないように思う。僕が意識しなくても、僕は彼女に出会う。そうおもった。

「キミには…」

「あなたには…」

「「何もない」」

「あの…朝です…起きてください…。」

朝の６時３０分。僕は妹に、おそらくは僕にしか気付かれないような小さな声で起こされた。

「あのさ…起こす気あるならもう少し声出したほうがいいと思うよ。まぁ起こしてくれることには感謝してるけどね。」

「はい…善処します…。」返答がすでに消え入りそうだった。こんな妹が僕以外の人と会話出来るのだろうか。

「朝御飯できたので…下に下りてきてください…。」「やだ。もう少し寝たい」少し駄々をこねてみた。

すると途端に妹の目に涙が溜まっていき、手は握りこぶしになって震えて、下唇をかんで必死に泣くのを堪えていた。

「わ…分かりました…それでは…。」

「待って冗談だからまずは泣くのをやめよう頼むから！もう今すぐ降りる五秒で降りるから少し待っててお願いします！」
速攻で謝罪。僕はシスコンなのかもしれない。
「分かりました…待ちます…。」
なんとか泣き止んでくれたが、声は相変わらず暗いままだ。取り敢えず寝間着のまま妹と共に下へ降りる。和食のいい匂いがしてくる。家には両親がいないので全て我が妹である静香の料理だ。この妹は本当によくできた妹で、家事のほとんどを任せっきりにしている。妹はもう高校生で、成績は学年でも必ず学年で１０位以内に入っている。僕にはよく分からないが、まるっこくて大きなぱっちりとした目や、低い身長から、所謂かわいい系として人気なようだ。
「いつも悪いね静香。ホント感謝してもしたりないよ。」
「それは…私の…セリフ…。」
「え？何か言った？」
「何でも…ない…。」
まぁ強いて欠点を挙げるとすれば、この静かすぎる性格だろうか。
「まぁいいか。取り敢えず食べようか。」
「はい…。」
さて今日の朝食焼き鮭と納豆と豆腐の味噌汁に、和風ドレッシングサラダ。焼き鮭は焼き加減が絶妙だし味噌汁も確実に普通のものとは比べものひならない程おいしいがその理由が分からない。文句のつけようが無い完璧な朝食だった。
「味…どうですか…？」
「僕に語彙が無いことは重々承知だし、わかったうえで言うけど…すごいおいしい。」
「ありがと…。」
そんなこんなで朝食を食べ終わると、着替えて学校へ行く準備をする。それも１５分程度で終わり、先に玄関で待つことにする。
「静香～！急げ～！」
そう言うと妹の走ってくる音が聞こえた。

「ごめん…。」
「別に気にしてないよ…。てか行こうか。」
コクりとうなずいて歩き始める妹。まぁ僕も急かした割に急いではいないし。
妹と歩きながら雑談していると、後ろからドドドド～！という音が聞こえてきた。そしてその音は僕の横でぴたりと止まる。
「ごきげんよう麗梨君。」さてここで驚くべき事態が発生。なんと僕の名前が今明かされた！誰に言っているのかは分からないけど。
「おはようございます石崎(ひめき)媛姫さん。」
「媛姫さん…おはようございます…。」
「さん、なんていりませんわよ麗梨君。静香ちゃんもため口でいいわよ？」
この人は石崎媛姫さん。僕と同じ高校2年生でクラスは小学1年の頃から同じという所謂幼馴染み。金髪の髪を長くのばしていて、スタイルはとてもいいらしい…というのは友達の評価で、学校内では非公式のファンクラブがある程だという。
「というか流石ですね。あなたは走って来たのに息もあがってないし汗一つかいてないなんて。」
「まぁ私体力は昔から付けてきましたからね。」
と言って石崎さんは上品に笑う。
ちなみにあんな言い方をしてはいるが、彼女は校内で間違いなく10位以内に入る戦闘力を持っているかなりの強者だ。空手部所属の彼女は、すでに部長よりも強い。さらに空手部の影の権力者にもなっている。まさにインペラトルだ。ブルートゥスごときには殺されないだろうが。
その後も石崎さん、静香、僕で何の内容のない話題で談笑した。そして学校に着くと静香と別れて教室へ。自分の席に座るまで石崎さんと話していると、
「ヘイヘイ麗梨～！元気してたかい？その様子だと元気そうだなところで昨日のニュース見たかいホント最近の政治家は信用ならんね

マイケルジャクソン最高アオッ！ポゥ！ヒーヒー！そんなこんなでお前とは鉛筆削りの将来性について語り合いたいのだが１０００円貸して？」
このたった一度の台詞であらゆる要素を詰めてくるのは僕の中学校からの親友である鷹島謙一。はっきり言ってこいつに話相手は必要ない。
「やだよ、てか石崎さんを無視するなよ…。」
「だから麗梨君、さん付けしなくていいと言っているのに。とはいえ取り敢えず鷹島さんごきげんよう。」「いや俺も挨拶忘れて悪かった媛姫。改めておはような。そうそう麗梨、お前に少し聞いておきたいんだけど。」
「何だい鷹島？」
「お前昨日の放課後月見夜宵と教室で話してたってホントか？」
「月見？だれそれ？」
「黒髪長髪の特別完璧流麗無欠秀逸の女の子だよ。」「黒髪長髪？ああ、そういえばお前と話した後そんな子と話したね。」
おそらくあの急に質問してきたあの子のことだろう。月見夜宵と言うのか…。
「マジでか？マジであの夜姫と二人っきりで話したのかよ！うわ～何だこいつ！マンションでお手玉ぐらいありえねぇ！」
「どうしたの急に？」
「お前この学校内でＮｏ．１の美女の事を知らんのか？あのお方と話せるだけでもすごいって事がわからんというのか？」
「ていうかあの人って美人だったんだ。」
「何だそれ！会ったはずなのにその反応！ちくしょ～ちょっとかっこいいからって調子のりやがって！お前なんか扇風機に指突っ込んで泣き喚け！」
地味なダメージだ。というかこいつとの絆は割と浅いのかもしれない。ふと横を見てみると落ち込んだ表情の石崎さんが「そんな…ライバルがまた増えたの！？」とかなんとか言っている。テストの結

果でも悪かったのだろうか。
そんな感じで雑談しているうちにチャイムが鳴り、みんな席に着いた。窓側の席にいれ僕は外を見ながら思い出していた。昨日のあの感覚…月見さんと話したときのあの気持ちの悪さを。
そして授業も４限目まで終わり昼休み。鷹島と石崎さんと三人で昼食をとることに…はならなかった。誘われたが断ったのだ。僕は結構ノリが悪い。理由もなく断ったのだし。
取り敢えず屋上で食べるか、と思い立ち、屋上への扉をピッキングする。
見てみると先客がいるようだった。（珍しいな…ピッキングの跡はなかったからちゃんと鍵を持っている人か僕並みにピッキングの腕がある人か…）
少し近づいてもう一度見てみると、制服からすると女の子のようだ。流れるような長い黒髪。透き通るような白い肌。そして消え入りそうな存在感。
「遅かったのね。待ちわびたわ。」
彼女は月見夜宵その人だった。

無印（後書き）

終わり方も少し捻れや！とか稚拙な文章だなオイ！とか思われたかも知れませんが申し訳ありません。これが今の私の限界です（爆）！自分の文才の無さを呪いつつせめてもう少しまともな文章書けるように頑張ります。それでは！

無自覚（前書き）

申し訳ありませんが更新は不定期です。すぐに更新したかと思えば次の更新は１ヶ月後とかになることもあると思います。１ヶ月で４～５を目標に頑張ります！

無自覚

この出会いは必然だった……みたいなかっこいいことを言えれば僕も少しはラブコメの主人公っぽくなれるのだろうか、なんて電波なことを考えていると。
彼女が至近距離で僕の顔を覗き込んでいた。
「何か用ですか？」
取り敢えず質問してみた。「へぇ～私にこの距離で見つめられて全く動じないなんて…流石に私なだけあるわね。」
この人は自分のルックスにかなりの自身をお持ちの様で。そういえば鷹島のやつが校内Ｎｏ．１の美女だとかなんとか言ってたな。
「僕が僕自身に見惚れるとでも？全くどんなナルシストですか？」
「それもそうね。」
彼女はつまらなそうに笑った。
「取り敢えずあなたの名前から教えてくれない？」
「告君麗梨。２年３組だ。君の名前は？」
僕は念のため月見さんの名前を知ってることは伏せておいた。
「私は月見夜宵。２年５組よ。末長くよろしく私自身。」
取り敢えず二人で握手を交わす。
「しかしホントに不思議な気分ですね。あなたとは他人とは思えない。」
「私もよ。あなたを初めて見かけたのはほんの３日前だけど、その時から私はあなたとは親友になれるのではないかと思ったもの。」
「親友？これ以上いらないぐらい親友多そうですけどね月見さん？」
「それ冗談でしょう？私と本質が同じあなたになら友達はいるけど親友はいないって感覚分かるんじゃないの？」
これは割と以外だった。僕ごときにすら親友と誇れる人が二人はいるのに。やはり考え方が同じでも、環境も同じであるとは限らないということか。

「その感覚は分かりますけど、僕には親友がいますからね。どうやらあなたとは違うらしい。」
そう言うと彼女はクスリと笑った。
「いえ、あなたと私は同じものよ。まぁ今のは親友という定義を曖昧にしたのが悪かったわね…。ではこうしましょう。あなたには、自分の全てをさらけだせる、そんな親友はいるのかしら？」
「……。」
僕は答えられなかった。僕には応えられなかった。そもそも自分の全てとか言われても、僕にはもともと何もない。さらけだすものなど持ち合わせていないのだ。
「やはりあなたにはいないのね。自分の全てをさらけだせる相手が。私と同じ、自分が無いあなたには。」そう、彼女の言い方こそまさしくだった。僕には自分が無い。自分が無いことをさらけだす覚悟もない。吐き気がするような弱さだ。「ねぇ明日からここで一緒にお弁当食べない？あなたとはやはり気が合うみたいだし。」
僕は考える。月見さんと話しをするのは中々面白そうだけどな…。今日は鷹島と石崎さんとお弁当食べてあげられなかったし、うん、断ることにしよう。
「悪いけど、僕には先約があるんだ。明日も無理だし、たぶんここに来ることは滅多になさそうだし断らせてもらうよ。」
そう言うと彼女は少し残念そうな顔をした。
「あらそう…それは残念ね。でも私はだいたいお弁当はここで食べるから気が向いたらいつでも来てね？私はまだまだあなたとお喋りしたいのだから。」
「分かりました。それでは僕はこれで。」
「ええ。また今度。」
僕は屋上を出ていった。彼女とは近いうちに必ず、また出会うであろうことを確信して。
さて、午後の授業も終わり、下校しようかと思ったとき、石崎さん

が話し掛けてきた。
「麗梨君、私今日空手部が休みですの。一緒に帰りませんか？」
これは珍しい誘いだった。石崎さんとは何度も帰っているけど、それは鷹島に３人で帰ろうぜと言われたときだけだったからだ。大抵は彼女は自分の女友達と帰っていたし、そもそも３人で帰るときは石崎さんと鷹島の部活が休みの時だけで、そんな事１年に一度あるかないか位なのだ。まぁ登校の時は朝練のない石崎さんとよく一緒になるけど。「今日はお昼も断っちゃったしね。いいよ、一緒に帰ろう。」
「本当ですか！？」
いきなり石崎さんが叫んだ。何だろう急に。僕が不思議に思っていると
「あ！申し訳ありません私つい粗相を…。」
「いや、あまり気にしてないよ。じゃあ帰ろうか。」「はいっ！」
僕と石崎さんは玄関へ向かって教室を後にした。

玄関を出て校門へ向かって校庭を歩いていると。
「危ないどいてどいて～！」
女の子がこっちに向かって突撃してきた。僕は石崎さんの手をとって横へと避ける。
「うわ～～～～！」
女の子は僕らの後ろにあった樹齢８０年と言われる大木ち激突した。
「さぁ、帰ろうか石崎さん。」
「だからさんはいらないと何度いえば…。」
「ちょっと待て～！」
後ろから声がしたので振り返ってみるとそこには……鷹島がいた。
「なんだよ媛姫に麗梨～。二人だけで帰るとか中々冷たいんじゃねぇの～？」
「君には部活があるだろう。」
「そうだったなはっはっはっ。そいじゃな媛姫に麗梨！」

そう言って鷹島は走り去っていった。どうでもいいけど去りぎわに鷹島が石崎さんに「頑張れよ！」といった視線を向けていたが何だったのだろう。中間テストの事だろうか。
まぁそんなどうでもいいことは無視して今度こそ帰ることにして石崎さんと校門を出ようとすると
「待ちなさい！」
今度は女の子の声が聞こえた。振り返ってみるとぼろぼろな姿の突撃少女の姿があった。樹齢８０年と言われる大木には傷一つついていなかった。中々頑丈なようだ。さて、この突撃少女、見た目から話すとまさにスポーツ少女という感じで、まず髪の毛はピンクのショートカット。肌は白いが何故かとても健康的な印象を受けた。顔は小さいが目はパッチリとしている。この少女も鷹島に言わせれば美少女なのだろうか。
「あなた！私を受けとめてくれてもいいんじゃない？」
勝手な言い草だった。そもそもどけと言ったのは彼女の方ではないか。
「あの～その程度の用なら帰ってもいいですか？」
学年が分からなかったので、取り敢えず下手に出てみる。
「まだ話は終わってない！」
ダメだったようだ。はぁ…仕方ない、いつもの理詰め作戦でいこう。
「どう考えてもこちらに非はありませんが、分かりました。百歩譲ってこちらにも非があったとしましょう。しかし、それでも突撃してきたのはあなただし、この件について改善できる事があるとすれば、むやみやたらに人に突撃しないというところだけではないでしょうか。なので僕たちのことを怒っても意味はないと思うんだけど……。」
そう言うと少女ははっとしていきなり
「すいませんでした！！」と叫んで土下座された。
「いや、分かってもらえればいいんだけどさ、何も土下座までしなくても…。」「いや、今回は私が悪かったです全面的に！なので後

ろの方どうか許してくださいお願いします！」
後ろの方……？と思って振り返ってみるとそこには。「……。」
不気味な笑みをたたえている石崎媛姫その人の姿があった。今の彼女には八百万の神々も笑顔で服従するだろう。今は神無月だが出雲大社にいる神々も今の彼女が呼べば彼女のもとへとんで来るに違いない。
「それではさようなら～～～～～！」
といって少女は去っていった。
「それでは帰りましょうか麗梨君♪」
やはり彼女には逆らわない方がいいみたいだ。そのことをかたく胸に誓って校門を出た。

「ところで麗梨君。」
学校を出てしばらくたった頃、それまでの学校での話題とか、勉強の話とかが一区切りついたところで石崎さんが聞いてきた。
「何？石崎さん。」
「お昼はどこへ行っていたのですか？」
ふむ…。別に彼女と会っただけでやましいことはしてないし（ピッキングはしたけどね）、友達に隠すようなことでもない。知る必要はない、みたいなことを言えるキャラでもなかったので、石崎さんには話すことにした。
「屋上へ行って食べようとしたら奇遇にも月見さんも屋上にいたんだ。だから二人で話してた。それだけだよ。」
バーン！！！！
石崎さんは急に両手で上品に持っていた学生カバンを急に地面に叩きつけた。
「ど、どうしたの石崎さん？」
「私達の誘いを断ってまで月見さんに会いに行きたかったと。そういう事ですか麗梨君？」
こ、怖い…。富士急ハイランドのお化け屋敷なんて目じゃないくら

い怖いよ！
「いや、別に会いに行ったとかじゃなくて、偶然いたというか、居合わせたというか…。と、とにかく石崎さんの誘いを断ったのは悪かったって！明日言うこと何でも聞くから許して！その振り上げた学生カバンをおろしてくださいお願いします！」
もう謝りまくりの僕。ヘタレキャラ定着の瞬間だった。
「何でも聞く……？それなら麗梨君。明日は中庭で二人っきりでお弁当食べましょう。それから明日も二人だけで帰りましょう。それで許してさしあげます。」「分かりました…むしろ一緒に居させてください……。」
なんて冗談めかして言うと、石崎さんは急に顔を真っ赤にして下を向いた。また怒らせた？
「あの～石崎さん？」
そう言って顔を覗き込むと、パ～～～～～ッ♪と明るい顔をした石崎さんがいた。取り敢えず機嫌は治ったみたいだ。よかったよかった。
家に帰ってみると、鍵が空いていた。妹は先に帰っていたらしい。
「ただいま静香～～！」
「お帰り…なさい…麗梨…君…」
またしても消え入りそうな声。ちなみにだが妹は絶対に僕のことをお兄ちゃんとかお兄さんとか呼ばず、麗梨君と呼ぶ。その理由を前に聞いてみたら、顔を赤くしてうつむかれてしまった。妹は両親のことでいろいろあったので深入りはしないでおいた。
「お風呂…沸いた…から……先に入ってて…。」
「ああ…ホントにいつも迷惑かけてごめんな。」
今日石崎さんに言うこと何でも聞く約束をしたけど妹にこそそうするべきかもしれない。よし！
「なぁ静香。今度の日曜日二人でどこかに出かけないか？」
そう言った瞬間、パリーンと皿の割れる音が聞こえた。
「え…？麗梨君いまなんて！？」

なんと珍しくはっきりと妹の声が聞こえてきた。
「いや…どこかに出かけないか今度の日曜日？」
「行きます！なにがなんでも行きます！絶対行きます！即座に行きます！」
なんとも急な妹の豹変。こんなの生まれて初めてだ。「じゃあまぁ行き先はまた決めるとして、僕はお風呂に入ってくるから。」
「はい…分かり…ました…。」
もういつも通りだった。
脱衣室へ移動し、シャワーを浴びて、風呂に浸かる。体が温まっていき、脳がマヒしていく。そしてふと思う。僕はいつまで保つだろうか。みんなの予想に反した空っぽで、何もない僕にいつ気付くだろうか。その時に僕は耐えられるだろうか。自分の正体がばれた時の痛みに。自分の本性一つ隠しきれない腑甲斐なさに。「吐き気すんだよ…」
何を考えているのだろうか。そもそもばれていようがなかろうが自分が無いという時点で十分僕は痛くて腑甲斐ないくだらない存在なんだ。本当に救いようの無い、どうしようもない僕は、とりとめのない、何の意味もない思考に耽った。

無自覚（後書き）

読んでみて分かると思いますがこの作品あまりにも謎なところが多いっ。そもそも高校の名前もでてないし、主人公のフルネームも二話目にしてようやく発覚だし！

とまぁこんな感じの拙い作品ですが一応構成は考えてあります。二部構成で、第一部は主人公の心を中心に、ヒロイン達との触れ合いを描いていきシリアス展開多めです。第二部ではヒロイン視点の話を作りつつコメディ重視に少しシリアスを混ぜていく様にします。駄文で稚拙な上にだらだら長いのかよ！と言われたらその通りとしか言えないダメな作者ですができれば最後まで読んでやってくださいお願いします。

無条件（前書き）

さて、三連休をフルに使って遅れるかもしれない分の埋め合わせです。
しかし本当にアホな作者です。サブキャラの鷹島くんの外見について一切触れていないという。救い様が無いですね…。
そんなアホな作者の文章なんて駄文にしかなりませんが、そんな駄文でも楽しんで頂けたら幸いです。

無条件

土曜日朝5時半。いつもより1時間早い起床。
今日は妹より早く起きれたかなと思って横を見てみれば、
「朝…です…よ…？」
すでにいた。
「待ってくれ静香。お前いつからそこに？」
「今…来た…とこ…。」
朝食を作ったりするからまぁこれぐらいの時間に起きていることは予想できる。しかしこの時間から起きてずっと僕を起こしているのだろうか。聞いてみるか。「なぁ、もしかしていつもこの時間から僕を起こしに来てるの？」
コクりと頷く妹。
「待て、それならいつ朝食を作ってるの？」
「4時半に…起きて…5時…から…。」
罪悪感……。なんか僕って本当にだめな兄だよな…。「静香…何もそんなにしてくれなくてもいいんだよ？お前はただでさえ頑張りすぎてんのに更に睡眠時間を削ってみろ。ホントに倒れるよ？」
「私は…大丈夫…麗梨君こそ…無理…しないで…。」その時…。妹は意識せずに言ったのであろうが、僕にはあまりにも残酷な言葉だった。無理をしないと人として生活できない化物同然の僕にとっては。
「……少し早いからもう少し横になってから行くよ。静香もゆっくり休んでな。」
なんとか感情を押し殺して妹に伝える。妹はコクりと頷いて下に降りていった。頭に手をおいて少し気持ちを落ち着かせる。落ち着かせるためにまた無理をする。その繰り返しだから、いつかはぼろがでるだろう。だからせめてその時までこの甘くて楽しくてやさしい幻想の中にいさせてほしいと僕は願った。

下に降りると焼きたてのパンの香ばしい香がした。ハムエッグとサラダ、紅茶がパンののせられた皿の横にあった。妹はさっきまでしていた洗い物を済ませると席についた。
「まったく、素直に休めばいいのに。…なんて、何にもしてない僕に言われたくはないだろうけどさ…。」僕は呆れてそう言うと、
「平気…楽しい…麗梨君の…お世話…するの…。」
と、小さな笑みを浮かべる妹。ホントに僕にはもったいない出来た妹だよ…。これは明日のお出かけはとびきり楽しいものにしないといけないな。
朝食を食べおわり、いつものように学校の準備を済ませいつものように妹と共に登校。いつものように妹との他愛無い雑談に花を咲かせていると、またドドドド〜〜〜〜〜！という音が聞こえてきて僕のすぐ横で止まった。
「ごきげんよう麗梨君♪」さて、いつものように現れた石崎さん。少しテンションが高めだ。
「おはようございます石崎さん。楽しそうですね、何かいいことでも？」
僕が言った途端に石崎さんから邪悪なオーラを感じ取る。
「麗梨君？まさかあの約束を忘れたのですか？」学生カバンを振り上げる石崎さん。
「い、いやいやいや忘れるわけ無いでしょう大切な石崎さんとの大切な約束なんですから！もう午前の授業の終了と同時に中庭へ直行ですよ！」
危ないちょっと忘れてた……。もし思い出せてなかったら今日が僕の命日だったかもしれない。
「麗梨君…今日…お昼…中庭で…食べ…るの…？」
妹が急に聞いてくる。
「うん、そのつもりだけど。」
「サンドウィッチ…とかの…ほうが…よかった…かな…？」

不安そうに聞いてくる妹。ホントにこの子は気を遣いすぎというか、自分のする事に自信が無さすぎるというか…。
「そんなに気にしなくていいんだよ静香？僕は可愛い妹がお弁当を作ってくれるというだけで嬉しいんだからさ。」
人のことを滅多に可愛いとか美人とか思わない僕にもわかる。妹は間違いなく最高に可愛いと。
「……。」
黙りこくってしまった…。あれ？僕またやらかしました？
「レ・イ・リ・く～ん？」ここにも一人ご機嫌麗しくない方が……。
「あなたは～自分の妹を口説くなんて～私に葬られたいのかしら～？」
「いやなんかもうホントごめんなさいすいません悪かったです言い訳しないので命だけは～～～！」
もう謝る謝る。謝罪の言葉でしりとりが出来るくらい謝り尽くしていると、もう学校についていた。
「静香～また後でね～！」「うん…麗梨君…またね…。」
妹と分かれ、今日の時間割を見る。午前の授業は全て難しそうでもなかったので寝て過ごすことにした。

そしてお昼休み。さて、石崎さんと一緒に中庭へ行くかと席を立ったところ鷹島がやってきた。
「ようよう麗梨さっきの世界史で世界の食物が足りないみたいな事言ってたけどそれってホントなのか？そしてマイケルとプリンスだったら俺は確実にシンディローパーなんだがどうよ一緒にメシ食わねぇ？」
相変わらず何の脈絡もない男である。そしてやはりこいつに話相手は必要ない。「あ～、ごめんね今日は先客がいるんだ。」
そう言うと鷹島はかなり落ち込んだ様子で
「何だよ最近付き合い悪すぎだろ…。誰と食うんだよ？」
「石崎さんとだけど…。」そう言った途端鷹島は何かに勘付いたよ

うに目を見開いて、すぐに目を瞑り、僕の肩に手を置いてきた。
「麗梨よ…。鈍感でアホなお前は媛姫の想いに気付いてないと思うから、一つだけアドバイスしてやる。あいつの事は下の名前で呼び捨てにしろ。それだけであいつは今日最高の笑顔を見せるだろう。じゃあ遅れないようにいけよ！」
そう言って鷹島は走って去っていった。相変わらず変な奴だ。そう思って教室を後にした。

さて場所は変わって中庭。石崎さんとお互いの弁当をつつきあう。僕の弁当（妹が作ったんだけど）は和食中心。石崎さんの弁当は五目チャーハンや青椒肉絲（チンジャオロース）等の中華料理だった。実は石崎さんはかなりの料理上手で和食も洋食もイタ飯もとにかく何でもいける万能型だ。また、石崎さんとの会話はとても楽しい。僕もそれなりに楽しい会話になるように心がけてるけど、石崎さんには勝てる気がしない。まぁそうして１０分くらい過ごしていた。
「そういえば、麗梨君は誰か好きな人っていますか？」
急なふりだな…話上手な石崎さんらしくない。
「どうしたの？石崎さん急に。」
そう返すと少し悲しそうな顔をした後、
「小学生からの幼馴染みな人の麗梨君と、そんな話しはしたことが無いなと思いまして。」
そういえばそうかもしれない。鷹島とは何度かあるけど石崎さんとはそういう話をした覚えが無いな。
「うーん、好きな人ねぇ。いないかなぁ。ただ、大切にしたい人ならたくさんいるよ。静香、鷹島、石崎さん…」
「待って！！！」
急に叫びだす石崎さん。あれ？今なんかまずいこと言ったかな？
「どうしたの石崎さ」
「さん付けはもう止めて頂けませんか？私はもう麗梨君とは名前にさん付けするような遠い仲だとは思っていないのですよ？私はあな

たともっと深い仲になりたいから…お願いします、みんなと同じように呼び捨てで呼んでくださいね。」
顔を真っ赤にして下を向きながらお願いされた。親友の真剣な頼みだ、それを聞かない僕ではない。
「そっか…分かったよ。改めてこれからもよろしくね、媛姫！」
その時、媛姫の顔はりんごに負けないくらい赤くなって、目には涙を溜めて、下を向いていた。
「体調でも悪いの、媛姫？」
「は…はひ！ら、らいひょうふへすわ。」
明らかにダメそうだった。「よいしょっと！」
僕は媛姫をお姫様抱っこで持ち上げる。
「な、何を！？」
「いや、取り敢えず保健室へ連れていこうかと思ってね。」そう言って保健室へ向かって歩きだす。
それから媛姫と喋ることは無かった。随分重症らしい。

媛姫を保健室へ送って教室への帰り道。
「待ちなさい！」
急に後ろから声をかけられた。振り向いて見ると昨日の突撃少女がいた。
「えーと、どうしたんですか？」
突然の出会いに戸惑いながら突撃少女に尋ねた。
「何って、昨日の件に決まってるでしょうが！」
え～と、それに関しては全面的に突撃少女の責任だって結論になった気がするけど…。
「あれは一応解決したと思うんだけど…。」
「んな訳ないでしょ！あの御方がいなければ今頃あなたは昨日の件で罪が暴かれて終身刑よ！」どんな判決をしたら突撃されそうになった人が終身刑になるんだろう。
「で、結局君は何しに来たんですか？」

「私は君なんて名前じゃないわ！天津藍満（あまつあいま）って名前があるんだから！」
頼んでもいないのに名乗られても……。
「え～と、ですから結局君は何しに来た「天津藍満！」
セリフに割り込まれた…。「…天津さんは結局何しに来たんですか？」
聞くと天津さんは待ってましたと言わんばかりにフッフッフッと笑った。
「あなたには謝ってもらうわよ！昨日私がしてみせたみたいに土下座でね！」
キ～ンコ～ンカ～ンコ～ン無情にも鳴り響くチャイム「あ、僕もう授業なので行きますね。」
言うと同時に走りだす。
「あ、待って！くそー、告君麗梨～！あなたは陸上部期待のルーキー（一年）天津藍満の前に必ず跪かせてやるんだから！」
何か聞こえるけど聞こえないふり、聞こえないふり。
さて、午後の授業も終わって、今日は媛姫と一緒に帰る予定だったんだけど、媛姫は倒れて早退したため、することが無い。だから、図書室へ行くことにした。４階にある図書室まで１階の一年教室から行くのは面倒だけど、どーせ暇だしね。
そして図書室へ入ると、
「あら、遅かったのね。」と声をかけられた。声がした方を見ると、案の定、月見夜宵がいた。
「約束もしてないのに勝手に待たれて挙げ句約束破りみたいな扱いは止めてください。」
「確かに約束はしてないわ。でもここに来るとは思ったの。それだけよ。」
そうですか、と言って月見さんが勧めてきた席…月見さんの向かい側に座る。
「ところで、昼休み。なかなか面白い事してたじゃない。」

「見てたんですか…。」
「それはもうばっちりと。」
おそらく屋上から中庭の様子を見てたのだろう。
「しかしあなたは本当に面白いわね。あなたを見ていることは、私の姿の一つの可能性を見ているようなものだから。」
月見さんは本当に楽しそうに微笑んだ。
確かにそうだ。僕と月見さんは本質では同じでも、選んだ道は違う。選んだ意義が同じなだけだ。今の月見さんの姿は僕のもう一つの可能性。
「僕は周りを騙して、自分を騙して今の生活を手に入れてます。けれどあなたは違う。」
月見さんはゆったりと微笑み、
「私は自分に正直に、周りを騙して、自ら望んで孤立したってとこね。」
と言った。
しかしこの解釈ですら言っていて吐き気がする。自分が無い僕らに、自分を騙すも何も無いのだから。
それからは月見さんと他愛無い話で盛り上がった。人について、世界について、ジーパンの需要について、そして自分達について。
「さて、私はもう行くわ。あなたとの会話はやはり最高ね。飽きることを知らないわ。」
満足気に月見さんは伸びをした。
「それでは僕も行きますね。また今度。」
「ええ、また今度。」
僕たちはどうせまた出会う。何もしなくても、何も起こらなくても。

無条件（後書き）

さて、第三話です。これで漸くヒロイン達の大体の性格や立ち位置を書けた気がします。まぁ気のせいかもしれませんが。
ここで少し今後の予定をお知らせします。
まず次の話は静香が中心で、その後藍満、夜宵の順に作っていきたいと思っています。
そして、その後の話でヒロイン達との関わりの中で成長していく主人公の心を書いて第一部の終了という風になるのですが、その中でリクエストをとっていきたいと思います。どのキャラのどんな話でもエロくなければ構わないのでどんどんリクエストしてください。
感想や苦情も大絶賛受付中です。よろしくお願いします。

無干渉（前書き）

さて、第４話です。おそらく連続投稿はこれで最後だと思います。
テスト４日前なのでそろそろ勉強しなくては…。しかし来週中には
また投稿出来ると思います。
ダメ作者の下らない駄文ですが楽しんで頂けたら幸いです。
ＰＳ．ＰＶ２０００越えました。大感謝です！

無干渉

僕には自分が無い。これは、僕が生きていく上で身に付けた処世術だと考えている。自分を無くすことによって、周りとのトラブルを避ける。自分を隠す事によって、周りに迷惑をかけないようにする。ゆえに僕には自分が無い。いてもいなくても同じ存在。世界に全く干渉しない存在。それが僕だ。

僕がこんな風に育ったのには理由がある。僕が８歳の時に両親は死んだ。殺された。それも、どこまでもくだらなくて、どこまでも意味のない愉快犯に。

しかし、僕がその犯人を憎むことはなかった。別に親が嫌いだったわけではない。むしろ大好きだった。それなのに何とも思わなかった。何とも想えなかった。その時、僕は悟った。ああ、僕は周りとは違う。周りとは相容れない。その事が悲しくて泣いた。呆れたことに、両親の死よりも自分との周囲の間にくっきりとした溝がある事のほうが悲しかったのだ。それを知ってついには悔やんだ。とうとう憎んだ。僕自身を。そして恐れた。こんな僕の正体が周りにばれるのがどうしようもなく怖かった。周りとは違う。たったそれだけで死にそうなほど苦しかった。

そして狡猾にして最悪な僕は自分を偽ることを選んだ。周りに偽ることを選んだ。自分を保つ強さも、自分をさらけだす強さも持ち合わせていなかった。

こうして僕には自分が無くなっていった。ただひたすら周りに流され、ただひたすら自分を流した。

以前、鷹島からの誘いを断ったりしたのは、僕はたまに誘いを断る事があると鷹島たちが思っているから、僕はたまに、３ヶ月に一度あるかないかの割合で誘いを断る事にしている。二回連続で断ったのは、媛姫との約束があったからだ。

しかしこんな生活が長く続く訳がない。いつかは周りも僕に対して

違和感を覚えるだろう。そしてすでにその兆候が見えている。周りは僕に対して確実に接し方を変えてきている。僕はそのたびにうまく周りを誤魔化しているがばれるのも時間の問題なのだと思う。だから後少しの間だけでも楽しもうじゃないか。僕が終わるその日まで。

「麗梨君…朝…起きて…。」
日曜日の朝７時３０分。いつもより一時間遅い起床。そして妹と朝から出かける日だ。
「おはよう静香。」
「ご飯…できた…から…早く降りて…来て…。」
そう言って先に下へ降りていく妹。僕も大きく伸びをする。今日は妹と一緒に町の駅の近くにある大型デパートで買い物をすることにしている。そのデパートはかなりでかくて一日ではとてもじゃないが回りきれない。さらに今日は日曜日だから客の数もすごいことになっているのだろう。まぁ急いでる訳でもないのだから、ゆっくりやるさ。

下に降りると今日の朝食はクロワッサンにバターロール、各種ジャムにアボカドサラダにコーヒーだった。「静香…家にクロワッサン作れるようなオーブンあったっけ？」
「それは…友達の家の…オーブンを…借りて…作った…。」
そこまでしてクロワッサンを作りたがった理由が知りたい。食べたかったのか？
朝食を食べおわると、すぐに私服に着替える。僕は赤い長袖の服にジーパン、上からネズミ色のパーカーを羽織るという何とも適当な服装。それからケータイと財布を持って玄関で妹を待つ。
「僕は準備できたけど慌てる必要はないからな～！」そう言って少し今日の予定を考えることにした。

静香ｓｉｄｅ

私は兄である麗梨君の声を聞き、服を着る作業を早めた。私は彼に、兄に対するもの以上の想いを抱いている。だから私は彼の事を兄とは呼ばない。そして彼の前ではまともに喋れない。学校ではふつうに明るく振る舞えるし、普通に会話もできる。しかし彼の前に立つと、恥ずかしさと緊張感でどうしてもうまく喋れないのだ。それほどに彼の存在は大きい。私にとって彼は兄以上の存在だから。彼の事を私はすでに異性としてとらえている。彼が愛しい。彼が欲しい。苦しくて、狂おしい彼へのこの想いを、私に止めることは出来ない。私が7歳の時に両親は死んだ。私はただ泣いているだけだった。でも、彼は泣かなかった。ただ強くあり続けた。両親が死んでから私達は二人だけで暮らした。家事のほとんどは彼がこなした。私と一つしか年齢が違わないのに、すでに現実と向き合う強さを持っていた。お金については、親の莫大な遺産と多額の保険金が入ってきたので問題なかった。私も中学生になると、彼の手伝いが出来るようになった。洗い物や洗濯ぐらいなら余裕でこなせるようになって、少しは彼の負担を減らせるようになった。しかし私は気付いた。彼に負担を掛けているのは家事なんかではない。わからないけど、そんな目に見えてわかるような肉体的疲労等ではなく、分かりにくくて目に見えない精神的疲労ではないかと思うんだけど、彼に疲れてないかとか聞いてもいつもはぐらかされてしまう。しかし、疲れていないと明言しない辺り、おそらくは何らかの負荷がかかっているのだと思う。後困ったことに、彼は自覚していないけど、非常にモテる。顔は中性的で整った顔立ち。黒く澄み渡った短い髪と瞳。きれいで染み一つない白い肌。だから私はなるべく友達を家には連れてこない様にしてる。しかし私には強力なライバルがいた。石崎媛姫。彼の小学生からの幼馴染み。彼女は確実に彼を狙っている。昨日だって彼と中庭で二人きりで食事をしていた。その分の差をうめてあわよくば一歩リードするために、今日のデートはなにがなん

でも成功させなくちゃ！こうして私の中での戦いが始まった。

麗梨ｓｉｄｅ

妹も着替え終わったようで、二人で家を出て鍵を掛ける。妹の着ている服はご想像にお任せします。（決して作者が女の子の服はよく分かんないからではないよ？）まぁ所謂可愛い系で、全体的に明るい色だったとだけ言わせてほしい。

さて、ここから目的地の大型デパートまで歩いて３０分かかる。バスで行けば速いいのだが、妹は歩いて行きたいと強く希望していたので、歩いて行くことにする。ただ黙って歩くのも辛いので、妹に話題をふる。

「そういえば、静香とこうして出かけるのも久しぶりだね。」

「うん…去年の…誕生日…以来…」

たしかに去年の誕生日は静香と海へ行った。しかも真冬の。ただ何をするでもなく二人で海を見ながら話した。思い出話や学校での生活、最近のニュースとかお互いの好きなテレビ番組。本当に何をしてやるでも、何をしてもらうでもなく、ただ二人一緒にいたそれだけで僕は楽しかった。妹も楽しんでいてくれたら嬉しい。そんな妹の誕生日を二人で過ごした。

そんな事を妹と話ながら歩いていると、

「あっれ～、静香じゃーん！」

急に後ろから声がした。振り返って見ると、そこには今風の格好をした二人の女の子がいた。

「明美ちゃん！？理江ちゃん！？」

「いやー静香もやるね、そんないい男捕まえるなんてさ～。」

どうでもいいけど結構古くないかその言い回し。

「違うよ！この人は私の兄で…。」

「えー！？何それ静香もしかしてブラコン！？」

というか僕の妹、友達相手には普通に喋るんだね…。僕相手にはど

もるのに…。お兄さん何だか悲しい…。「明美ぃ…？理江ぇ…？」
おや、何だか妹の様子が…「あ、まずいこの雰囲気は……。」
「悪魔泣かせの静かなる混沌…。逃げないとやばいよ明美！」
「逃がさない…。」
一瞬にして二人の背後に回り頭を上から鷲掴みする妹。
「謝るまで…帰さないよ…？」
「ひ、ひぃぃぃぃ！」
「ごめんなさい悪かったです！お願いだからこの前みたいな学校の屋上からバンジージャンプの刑はやめて～～～～！」
えーと、学校で僕の妹は何をしているのだろう。
「フフ、大丈夫だよ？ちゃんと謝った人に罰を科すほど私は残酷ではないもの。でももうこの人との買い物の邪魔はしないでくれる？さもないと…。」
「さ…さもないと？」
妹は二人の耳に口を近付け、耳うちする。二人の顔はみるみる青ざめていき、目は大きく見開かれ、体はブルブル歯はガタガタ、そして妹の不気味な笑み……。「分かった？」
「「は、はい！」」
「じゃぁもう行っていいよ？」
「し、失礼しました～！」すごい速度で走り去っていく二人。ボルトが見たら、もう余裕こいた走りなんか出来ないだろう。
「なぁ、静香…。」
「なぁに…麗梨君…？」
いつもどおり（僕にとっては）の喋り方に戻る妹。
「学校…楽しいか？」
そう聞くと、妹はゆったり笑って、
「うん…とっても…。」
歩き始めたのだった。
さて、それから１０分程歩くと、デパートに着いた。

「すごい人混みだなぁ。まぁいいか。静香はどこに行きたい？」
「ベビー用品…。」
いきなりぼけ始めた！
「静香…？さっき友達に会った時からなんかいつもと違わない？」
「そんな…事…ない…。二人の…未来を…考え…たら…。」
そういって顔を赤らめうつむく妹。
「まぁ冗談はその位にして、静香に行きたいところが無いなら、僕ちょっと本屋を見てきたいんだけど。いいかな？」
顔を赤らめたままコクりと頷く妹。
「じゃぁ行こっか。」
妹の手を引いて本屋へと向かった。妹の顔が更に赤くなった気がしたけど気のせいだろう。

本屋で目当ての本数冊を買った頃、時計を見るともうお昼時だった。お腹もすいたので妹の好きなうどん屋に入る。
お互いにあらかた食べ終えた頃、妹が口を開いた。
「今日…は…ありがとう…麗梨君…。」
「その台詞を僕が言いたくて今日は一緒にいるんだから言わないでよ。」
「う…ごめん…なさい…。」
「謝らなくていいって。でも改めて、いつも僕の世話してくれてありがとう静香。これからも迷惑かけると思うけど、その時は隣で支えてくれると嬉しいな。」「！！！」
急に大げさなリアクションをとる静香。
「どうしたの？」
「れ…麗梨君、今の言葉ってつまり…」
また喋り方が変わった。近くに友達でもいるのか？と思って辺りを見回してみると…
「あれ？あいつは…鷹島！？」
なんと鷹島がいた。

「くっそ～いいところまできてばれたか～！しかし鈍感君、おまえも中々残酷じゃないか。天然で妹にプロポーズしちゃうんだからさ～！なぁ、そうは思わないか媛姫！」
「な！媛姫までいいるの？」
見当たらないけど一体どこに…
「ここですわ。」
「うわぁ！」
何といつの間にか僕の席の隣にいた。向かい側に座っていた妹でさえ気付かなかったようだ……。恐るべし石崎媛姫！！
「実の妹をデートに誘うだけに飽き足らず、プロポーズまでするだなんて、麗梨は変体ですの？変体ですのね？」
オーラが……スカウター破裂どころの騒ぎじゃないって！オーラで人殺せるって！絶対２００以下のダメージを受け付けないって！ちなみに僕が媛姫と呼ぶようになってから、媛姫も僕のことを麗梨と呼ぶようになった。少し恥ずかしい…。じゃなくて！
「え～とですね、今のは妹と家族の絆を深めただけですから他意は…。」
「え？…麗梨君…そうだったの？…そんなぁ…ぐす…。」
なぜ泣くのですかマイシスター？
「挙げ句の果てに妹を泣かせるなんて…もう最低ですわ麗梨！」
「ま…待っｔ「問答無用！！！」
こうして僕は高校生活では初めての媛姫からの手刀をもらいましたとさ。

楽しんでる。僕は間違いなく。人間じゃないくせに。人間以下のくせに。この怪物ごときが、この人間もどきが、自分の本来の姿を忘れて幻想の世界に入り浸っている。下らない。意味が無い。何もない。本当に吐き気がする。苦しくて辛いからといって本来いるべき世界から逃げている。本当に弱い。本当に怖い。いつかこの生活が終わることを知ってるから。

それを知りながら僕は今日も笑って過ごす。それを忘れながら過ごす。

やはりどこまでいっても下らない存在だ、と僕は思った。

無干渉（後書き）

さて、読んで頂ければ分かると思いますがこの作者。服装の表現が恐ろしく下手ですね。キャラの服装を読者の想像に任せるなんて世界初の愚行ではないでしょうか。
そんなダメ作者ですがそれでも応援してくださる方がいれば最後まで見守って頂けたら幸いです。
それでは。

無許可（前書き）

今回の話はかなり長いです。申し訳ありません。おまけに駄文。本当に申し訳ありません。
下らない作者の幼い文ですが、楽しんで頂けたら幸いです。

無許可

僕が周りとかけ離れているところは感受性だろう。個性がどうだの、それが君のいいところでもあるんだよ、なんてレベルの話ではない。ひとつひとつの物事に関する皆との意見の相違は、もはや同じ人という種なのかも疑わしいレベルだ。周りが赤いと言っている物に対して、僕はそもそも無色透明だと答える。それ程にこの僕は終わってる。終わってしまった僕は、始まりを求める。しかし望んだ始まりがきたところで僕にとっては終わりの始まりでしかない。そして終わりは終わらない。そんな事を繰り返す僕に価値なんてある訳が無い。無価値でないはずが無い。本当に終わってる。虚ろに無いのではなく、はっきりと無い。要するに、僕は虚無ですらない。本当に何もないのだ。人は自分に無いものを求める。人は自分に無いものを欲しがる。それが人の夢というものの本質だ。しかし僕は違う。僕にはいらないものが多すぎる。そもそも僕という存在自体がいらない。この世界から僕という存在を無くしてほしい。それこそが僕の願いであり夢だ。例えばこの化け物じみた本性。例えば
この怪物じみた個性。今の僕にはすべてが無用だ。
だからこそ存在しないものを欲しがる。例えば妹に好かれる優しい兄。例えば小学生からの気のいい親友。僕がそんなものになれるはずが無い。自分に無いものなんてレベルではない。そもそもそんな自分は有り得ない。僕にとっての理想は存在しえない僕の姿だ。僕がいるべき現実は理想とは程遠い、そもそも同じ定規で測ることが見当違いな、そもそも人として扱うこと自体が勘違いも甚だしい、そんな気持ち悪くて吐き気がする訳の分からない何かなんだ。そんな中で生きていくのが辛い。しかしこんなくだらない世界で死ぬのも癪だ。だから幻想の世界へと僕は逃げた。弱くて脆くて脆弱。弱くて薄くて薄弱。弱くて病んでて病弱。弱くて虚ろで虚弱だ。真の臆病者なんだ。真の薄情者なんだ。理想では無い世界を切り捨てる

ことに何の躊躇もないのだから。本当にどこまでも若輩者だ。本当にどこまでも弱敗者だ。吐き気がするほどに。

いつもの登校風景。妹との雑談に花を咲かせ、後から媛姫と合流して、会話に夢中になっているうちに学校に着く。玄関で妹と別れ、媛姫と教室までまた雑談する。そこへ朝練帰りの鷹島が加わり勝手に話題を振って勝手に自己完結して満足そうに笑う。そんないつも通りの風景。それがいつも通りの風景。だからこそ僕は……。

今は2限目と3限目の間の休み時間だ。なんとなく廊下を出てぶらぶらしていると

「告君麗梨！」

背後から声をかけられた。この無駄に明るくて元気な声色は…。

「天津さん…だったっけ？」

そう言うと天津さんは満足そうに笑い言った。

「その通り！私こそがあなたの永遠の宿敵にして運命の好敵手…天津藍満よ！」勝手な解釈だった。相手にするとまた面倒そうだな…。よし、素通りで行こう。「それでは僕はこれで。」「待ちなさい！」通り抜けようとする僕のブレザーの袖を捕まえる天津さん。どうやら逃げることは出来ないらしい。

「何か用ですか？」

「用も何もあなたまだ謝ってないでしょう。あなたがぼーっとしてたせいで私がぶつかっちゃったんじゃない！！」

1日空けても彼女の怒りは納まらなかったらしい。全く執念深いことだった。

……こんな僕なんかに誰かに固執される様な価値なんてないのに。

「分かりました、謝りますよ…。」

「そんな嫌そうにしないでくれる？」

嫌なんだから仕方ないと思う。口には出さないけど。「タイヘンモウシワケアリマセンデシタ―。」

「心がこもってないでしょ！…もういいわ。どうせまともに謝ってもらえるなんて思ってなかったからね…。」
おや、彼女は割と物分かりがいいのかもしれない。
「そう、じゃぁ今度こそ僕はこれd「その代わり！」訂正。やはり物分かりは悪いようだ。
「何ですか急に？」
「今日の私の買い物に付き合いなさい。荷物持ちとしてね。」
しかも意味が分からなかった。何故僕が？
でもまぁ。彼女にはこれからも迷惑かけられそうだし言うこと聞いておいたほうがいいのかもしれない。
「ごめんね、面倒くさいからそういうのはちょっと…。」
まぁ断るけどね。
「な…何ですって―！？」そして予想どおりの返答。分かりやすい人だった。
「何でも何も面倒ですし。」
「ちょっと！学年でも一二を争う美人な私と出かけられるなんて！罰どころか幸せでしょうに！言うに事欠いて面倒！？」
「え、天津さんって美人だったんですか？」
「あー！もうむかつく！」そして一人暴走状態に陥る天津さん。今なら容易に逃げられそうだな。
「それでは天津さん、僕はこれで。」
そう言って背中を向け立ち去……ろうとした。
「待ちなさい告君麗梨！」どうやら気付いていた様だ。なかなか隙がない。
「まだ何か？」
「いいから買い物に付き合いなさいよ！」
どうやらこの問答はいつまでも続きそうだ。…仕方がない。
「はぁ…分かりましたよ、一緒に行きましょう。」
「あーもう！何も言わずについてくれば……ってえ？」
彼女は僕がまた否定したと思ったようだ。

「分かりました、ついていきましょう。」
「わ…分かればいいのよ。えっと、それじゃぁ今日の放課後に裏門の前に来てね。すっぽかしたら殺すわよ？」
彼女は冗談半分に言ったようだが僕には願ってもない事だった。いっそすっぽかすのも有りかもしれない。……冗談だけどね。
「それでは、授業があるので僕はこれで。」
僕はまた呼び止められないうちにそそくさとその場から離れた。

さて、四限目が終わって昼休み。今日はいつものように媛姫と鷹島とでお弁当を食べていた。
「まぁそんなわけで俺の家のカーペットは青色がいいと思うんだよ麗梨。」
こんな感じでいつものように鷹島は自己完結話をしていたので適度に無視しながら媛姫と話していた。
「そういえば麗梨、今日も私部活がありませんの。一緒に帰りませんか？」
そういえばこの前は媛姫は保健室行ってそのまま早退したから一緒に帰れてなかったんだよな。……あ、でも天津さんと約束があるんだっけ…。
「ごめん媛姫、今日は先約があるから無理なんだ。また今度誘ってよ。」
そう言うと媛姫は悲しげに俯いたがすぐに顔を上げて微笑んだ。
「それは残念ですけれど、先約があるなら仕方ありませんわね。どうぞ気にしないでください。」
優しい。さっきは明らかに悲しげだったのに、すぐにいつも通りに振る舞ってくれる。媛姫は自分の気持ちよりも相手の気持ちを汲んであげることのできる、優しい人なんだと改めて実感した。
「ところで麗梨？」
「何かな？媛姫。」
「最近月見さんとは会っていらっしゃるのかしら。」何で急に月見

さんのことが話題にあがるんだろう。
「昨日と今日は会ってないけど…急にどうしたの？」「いえ…少し忠告をと思いまして。」
忠告？彼女に何かあるのだろうか。何もないと思うけれど。何も無いと思うけれど。
「忠告って何を？」
そう言うと媛姫は神妙そうに口を開いた。
「はっきり申しあげますと、彼女は危険です。」
ドクン、と…その時、心臓が急に大きく動いた気がした。まるで…自分の正体を言い当てられたかのように。いや、実際言い当てられたのだろう。彼女と僕は同じものだから。
「どうしてそう思うの？」僕は慎重に…普段どおりを装って聞いた。
「他のクラスのお友達と話すときにたまに彼女もいるんですが…。彼女からは何というか…普段は特に変なところはない普通の女の子なんですけれど、本当に極たまに感じるんですの。何というか…絶無というか、そんな分からない何かを。私はそれを感じたとき、堪らなく怖かった。何が怖いのか分からない程に怖かったんですの。だから麗梨、悪いことは言いません。月見さんとはあまり関わらないほうがいいです。」
「分かった…気を付けるよ。」
そう言うと媛姫は満足そうに笑い、食事を再開した。…ああは言ったものの、多分僕はまた彼女と会うだろう。僕が望むと望まないに関わらず、否応なしに、僕らはまた出会う。それはルールの様なものだ。誰にも変えられない。そして僕と彼女も変わらない。永遠に。
さて、放課後になった。裏門のところへ歩いていく。すると天津さんの姿が見えた。先に来ていたようだ。……てっきり、遅れてきた天津さんに遅れたのを僕のせいにされて怒鳴られる、という訳の分からない事になると思ったのに。
「遅い！１０分遅刻よ！」

…訳も分からず怒鳴られるのは当たっていたようだ。「えっと、時間の約束なんてしてましたっけ？」
そう聞くと彼女は不機嫌そうな顔で答えた。
「集合時間なんて私が来た時間に決まってるじゃない。」
さも当然というように暴論を吐く天津さん。
「そうですか……はぁ…。」
恐らく文句を言っても無駄なんだろう。
「じゃぁ早く行くわよ。」「はいはい……。」
「はいは一回！」
久しぶりに聞いた怒り方だった。

天津さんからは行き先も教えてもらえなかったので、もうひたすらに天津さんについていくしかなかった。しかも天津さんの歩くことの速いこと速いこと。ついていくのが大変だ。さすがスポーツ少女。関係ないけど。
「着いたわ。」
彼女は立ち止まって言った。そこは、昨日妹と一緒に行ったデパートよりも遠くて小さいスーパーのようなところだった。買い物するなら絶対あのデパートの方がよかったろうに。
その事を彼女に伝えると、「あそこは人が多くて駄目なのよ。」
確かにこのスーパーの周りには人が……いない？確かにあのデパートよりは小さいけど、決して大きくないわけではない。なぜだろう。
僕が首をひねっていたからだろうか、彼女は面倒そうに話した。
「今日はここ定休日なのよ。」
意味が分からなかった。それを知っててなぜここに？「あのさ、じゃぁ何でここに来たのかな？」
「うるさいわね、少し黙ってて。…おじさーん、いるー？」
彼女が店の方に叫ぶと、正面の扉が開いた。そして中からは、ハゲ頭に腹巻という昭和の中年代表の様なおじさんが出てきた。
「おう、藍満じゃねぇか。どうした？」

まぁ予想どおりの元気なおじさんだった。
「いや、頼んでおいたものを受け取りにきたの。」
「ああ、あれね……。ちょいて待ってな。」
そう言うとおじさんは店の奥に消えていった。
「あのおじさん誰なの？」「あの人はここの店長さんで、名前は私も知らないの。」
名前も知らないおじさんとあそこまで親しげなのか。驚きだった。
「あいよ、おまちどおさん、藍満。」
そう言っておじさんが出てきた。手に何か持ってる。あれは…スパイク？
「それ、部活で使うの？以前陸上部だとか言っていたけど。」
そう聞くと、スパイクが手にはいったのが嬉しいのか、天津さんは満面の笑みで答えた。
「そうよ、ここのスパイクで走ると何だかいつもより早く走れるの。」
そう言って満足そうに手に入れたスパイクを見つめる天津さん。
「ところでおじさん、スーパーなのに何でスパイクなんか売ってるんですか？」はっきり言って疑問だった。デパートとかなら分かるけど、スーパーでスパイク売ってるのはなかなかないと思う。
「あー、そもそもうちはスーパーなんかじゃねぇぞ。何でも屋だ。金さえ払えば何でも作る店なんだ。……てか誰だおまえ？」
今更な質問だった。
「僕は告君麗梨といって、天津さんの先ｐ「奴隷です。」
横から割り込まれた。
ここで誰が奴隷なのか問い詰めても無駄だということは明白なので黙っておくことにした。
「……ところでおじさんの名前は何なんですか？」
無駄とは思うが聞いてみる。
「俺か？うーん、俺の名前はイッパイアッテナ…。」どこかの文字が書ける猫のような言い方だった。

「……面倒だから教えんのはやめだ。俺のことはおじさんと呼べ麗梨。」
いきなり呼び捨てだった。「さて、目当てのものは手に入ったし、もう行くわよ。それじゃおじさん、また来ますから。」
そう言って天津さんは僕のブレザーの裾を引っ張って無理矢理連れていくようにした。
「おう、あばよーガキ共。また来いよー。」
そうして僕たちはスーパーを後にした。

「ところで天津さん。」
「何？告君麗梨。」
どうでもいいけどフルネームで呼ぶの止めてくれないかな……。
「いや、僕来た意味あったのかなって。」
「そんなのある分けないじゃない。」
やはり無茶苦茶だった。
やれやれ…とため息を吐くと……。
「あれ、あいつ…天津じゃない？」
急に声がしたので見てみると、そこにはうちの制服を着たやたらと派手な女の人がいた。
「清水…先輩…。」
どうやら天津さんの部活の先輩のようだ。
「あんた今日部活あったわよねぇ。何、サボってんの？」
この人…まるで天津さんを威圧しているような……。「いえ…今日は部活休みで……。」
「いや、昨日あんただけグラウンド２０周って言ったわよねぇ？」
「そ…それは…。」
「なのに男連れ回して遊ぶとか、何、天津って割と不良なわけ？」
この人は明らかに天津さんに敵意を持っている。
普通なら止めに入るべきかもしれないが、そんな事をしたら天津さんが次に部活に出たときの負担がひどくなるだけだ。今は傍観に撤

しよう。
「ホントにあんたって最低よね。先輩の言い付けを破って男遊びだなんて。これは明日の部活はグラウンド１００周ね。」
「そんな…」
「あんたみたいな欠陥品はそれぐらいしないと分からないんでしょう？本当に無価値ね。」
その時…。僕は体の内側から堪えきれない何かが沸き上がってくるのを感じた。「清水さん。」
そしていつの間にか僕は口を開いていた。自分で決めた事一つ守れないなんて…本当に僕は弱い。
「誰よ、あんた。関係ないんだから首を突っ込まないでよ。」
「はい、関係ないです。でも、あなたが言ってることは滅茶苦茶だ。そもそも顧問でもないあなたに練習内容や日付を改編することはできないでしょう。生徒手帳にも書いてあるでしょう、部活の全決定権は顧問にあるって。だから単にあなたたちが言っただけならそんなものは無効ですよ。」そう言うと清水さんは苛立ちを隠そうともせず怒鳴る。
「うるさい！あんたには関係ないでしょう！私は部長なのよ？この女に練習させるぐらいの権利…。」
「ある分けないでしょう？清水さんは部長ということは3年生ですよね？本当に僕より年上ですか？だいたい部長なんて顧問の雑用でしかない。立派ではあっても偉くはないんです。自分の立場ぐらい弁えたらどうです？」
「あなたこそ自分が後輩だって分かってんの？やたら偉そうだけど。」
「部長と同じで先輩なんて立派なだけです。僕より長く生きてるって意味に限定すればですが。しかしあなたには尊敬するだけの価値があるとは思えない。」
「何ですって！」
「いやいや、ご自分の行動を振り返ってみたらどうです？まぁあな

たのようなタイプには分からないのでしょうけど。」
そして訪れる沈黙。清水さんは何か反論材料を探しているようだが、浮かばないようだった。
憎悪のこもった目でこちらを一瞥すると、そのまま何も言わずに立ち去った。
「天津さん、ごめんね。」僕はすぐに謝っていた。
「何であんたが謝ってんのよ。」
心底不思議そうに天津さんは首を捻っていた。
「多分明日の部活はもっと酷いことされると思う。やっぱり僕はあそこでは傍観に撤するべきだったよ。」しかしどうしても耐えられなかった。天津さんは僕とは違うのに、僕と同じ痛みを味あわなきゃいけないなんて。
「そんなことないよ！」
彼女は必死そうに叫んでいた。
「私さ…部活に入った時からああいうことされててさ…。本当は嫌だったけど、先輩の、しかも部長の言うことだから逆らえなくて…。でもあんたの言葉で気が付いたよ。先輩なんて偉くはない。絶対じゃない。」彼女は楽しそうに微笑んだ。
「ただ、私が恐がってただけなんだって。先輩を恐れながら、そのことを認められなくて、さも自分が先輩にいじめられる可哀想なヒロインであるかの様に、ただ先輩に従ってた。でもそんなの変だよね。ただ私は先輩から逃げてただけなのに。」
そんなことないと思う。むしろ彼女は戦っていたのだろう。先輩なんぞに屈しず、ひたすら練習してきたのだから。
少なくとも、僕みたいに逃げてない。
「だからさ、私戦うよ。先輩にも抗う。もちろん、言われたことを拒むんじゃなくて、むしろそれを完璧にこなしてやる。」
「そうですか…頑張ってくださいね。」
彼女が笑顔で決意したので、僕も笑顔で応援した。
「うん？どうしました？顔が赤いですよ？」

「うっさいバカ！……あんたこそ、尊敬に値する先輩だなんて、そんなこと…。」
「何か言いましたか？」
「何でもない！」
どうやら理不尽に怒鳴られることはお約束になりそうだった。

僕は別に天津さんを助けようとしたのではない。もしそうなら、僕は口を出さなかった筈だ。
では何故意見したのか。そんなのは決まってる。自分が痛かったからだ。取り敢えずその場を凌げばこの痛みからは解放される。だからその場凌ぎでなんとかした。その分のダメージをくらうのは天津さんなのに。吐き気がするような偽善だ。ああ、本当に最低だな、この僕は。どこまでも…阿呆らしい、バカらしい道化だった。

無許可（後書き）

え～皆さんお疲れさまでした。藍満は登場回数が少なかったので、少し頑張ってみたらこんなことに……。次回からはいつもどおりの長さで投稿できると思います。本当に申し訳ありませんでした。

それでは

ＰＳ．作品中にあった大きな矛盾を直しました。普段から各話の細かい修正はしていましたが、今回の間違いは酷いです。やはりダメ作者ですね……。

読者の皆さんに多大なご迷惑をおかけしました事を深くお詫びいたします。

無意識（前書き）

第六話です。
相変わらず成長のない、空っぽな文章ですが、楽しんで頂けたら幸いです。

無意識

僕と本質が同じ少女である月見夜宵。彼女にも、僕と同じで自分が無い。しかし僕のそれとは種類が違う。彼女は周囲に依存する。周囲に自分の意見が左右される。周囲に自分の行動が左右される。要するに、彼女は考えることを放棄したのだ。自分に正直に、意見の放棄をした。そしてそのために周りに偽ったのだ。そうすることで、その意見がさも自分の意志であるかの様に見せかけて、本来の姿を隠した。

僕は違う。自分を知られたくないが故に、自分を偽り、そうすることで周囲に偽った。

しかし両者の間にたいした差はない。どちらにしたって、終わってる事に変わりはないのだから。

さて、天津さんとの買い物に行ってから2週間程たった。もう中間テストも終わり、１０月も終わりそうな時期。そんなある日の昼休み。その日は鷹島も媛姫も部活の昼練習でいなかった。大会が近いそうだ。

まぁそんなわけで今日は1人で昼御飯だ。別に寂しくないとは言わないけど、やはり一人でいると落ち着く。……僕が無理しないでいられる唯一の時間だから。そんな事を考えながら、一人で食べる時は必ず来る（当然ピッキングを行う）屋上でお弁当をつついていると。

「あら、待たせたわね。」月見夜宵が屋上に入って来た。

「別に待ってるなんて言ってないでしょう。」

「あら、そうだったかしら？よく覚えてないわ。」

そう言いながら僕の隣に来てお弁当を広げる月見さん。

「それにしても、あなたに会うのも久しぶりね。」

「そういえばそうですね。」

思い出してみれば、彼女に会うのは約２週間ぶりぐらいだ。たしかに随分と会ってない。しかしそれでも、彼女から感じる親近感は、ある種僕には心地よいものがあった。
「どう？学校は楽しい？」彼女は楽しそうに聞いてきた。
「まぁまぁ、ですかね。楽しい時もあるんですが、やはり僕のいるべき場所はここではない事が分かってしまう。楽しい時があるだけに余計悲しい。なんで僕の居場所はここではないのだろうってね。その分で差し引きゼロってところです。」
そう答えると、彼女はまた楽しそうに微笑んだ。
「さすが私ね。答えがほとんど同じだなんて。」
それから、彼女と会った時恒例の、何の意味のない、とりとめのない会話が始まる。それはあまりにも非生産的で、しかし両者の間には確実にとある確信が強まった。やはり彼女は僕と同じだ。そんな虚しい確認作業も、２０分程は続いていたようだ。予鈴がなっていた。
「あら、もうこんな時間なの？まだまだ話したいことはいっぱいあったのに。」彼女は心底残念そうな顔で言った。
「まぁ仕方がないでしょう。それではまた明日。」
僕はお弁当を片付けて屋上を出ようとした。
「待って。あなた今日の放課後暇かしら。」
今日は鷹島も媛姫も部活で一緒には帰れない。まぁ暇といえば暇だった。
「暇ですけど、何かあるんですか？」
「今日、一緒に帰らない？ついでに私の家に招待したいのだけれど。」
ふむ…。これは彼女自身の話を深く聞くいい機会かもしれない。
「分かりました。どこで待ち合わせますか？」
「裏門にしましょう。安心なさい、私が来たときが集合時間だなんて事は言わないから。」
どうやら天津さんとのやりとりも見ていたようだ。…ちょっと怖い

な。
「分かりました。ではまた後で。」
「ええ。また後で。」
授業に遅れそうだったので、小走りで教室へ向かった。……そういえば、月見さんは一緒に来なかったけど、授業に間に合うのだろうか。

さて、放課後になった。裏門に向かって歩いていくと、
「あれ、告君麗梨？」
呼び止める声がしたので振り返ってみると、ジャージ姿の天津さんがいた。
「天津さん久しぶり。部活？」
そう聞くと楽しそうに答える天津さん。
「ええ、ええ、それはもう！この天津藍満、現在絶賛青春中って感じ！あんたも帰宅部なんてやってないで何か部活始めてみれば？かなりおもしろいわよ？」
今の天津さんの方が全然面白いと思うんだけど……。なんかキャラ違うし。
「今は外周？」
「うん、ウォーミングアップで１００周ね。」
一周２００メートルを１００周…ウォーミングアップで２０キロメートル！？
「あのさ、それってやっぱり先輩に言われて…？」
「うん、そうよ。」
にこやかに答える天津さん。
「やっぱり僕のせいかな…。」
「いやいやそんな、むしろ私ははこの状況楽しんでいるからさ、気にしないでよ。」
「うーん、そうは言っても悪い気がするし…何か僕にできることがあったら言ってくださいね。」

「あはは、わかったよ。それじゃ私は行くから。」
そう言って天津さんはまた走りだした。
というかまずい、月見さんを待たせてるかも…。僕も小走りで裏門へ向かった。

裏門へ着くと、案の定月見さんは待っていた。
「あら、遅かったのね。待ちわびたわ。」
いつもの台詞も、今回だけは当てはまる。
「ごめん、月見さん。」
そう言うと彼女はにこりと笑って、
「余り気にしてないわ。それより早く行きましょう。」
と言って裏門へ向かって歩きだした。僕もあわててついていく。

彼女の家は学校から２０分位の所にあった。外見は、ごく普通の二階建てな一軒家だった。本当に何の変哲もない。そういうところが、僕の家にそっくりだった。彼女は扉を開けて中へ入っていく。
「どうぞ、あなたもあがって。」
言われたとおりに中へ入り、靴を脱いで彼女の後をついていく。そのまま居間へと通された。
「何か飲み物持ってくるからくつろいでいてくれて構わないわよ。」
そう言って彼女は居間を後にした。
それから数分後。
「お待たせ。緑茶は好きかしら？」
お茶菓子と緑茶をお盆に乗せて、月見さんが入ってきた。
「お構い無く。ところで…。」
僕はずっと気掛かりだったことを口にする。
「今日は何で急に僕を呼んだんですか？」
昼休みの時は僕にはとって悪くない話だと思っただけだったからついてきたけど、考えてみればおかしな話だ。人に聞かれたくない話をするにしたって、屋上で十分なはずだ。何故なら鍵が掛かってる

のだから、ピッキングのできる僕と、理由は知らないけど屋上に自由に出入りできる彼女位しか、あの屋上に人は来ない。だからただ単にないしょ話がしたかったからだとは思えない。
「雰囲気づくりのためかな。あなたには聞きたいことがあったから。…そうね、早めに言ったほうがいいのかもしれないわね。」
そう言って、緑茶を一口飲み、自らを落ち着けるようにした後言った。
「これから話すのはね、私の今までの人生で最大の疑問であり、命題でもあるのだけど…ねぇ、告君麗梨君。私と同じであり、私の可能性であるあなたに聞くわ。私って今…生きているのかしら。それとも死んでいるのかしら。」
それは。その言葉は。僕にとっての人生で最大の疑問であり、命題でもあり、そして何より奇問で鬼門であった。それこそが、僕が今まで結果を保留してきたもの。それこそが、僕が今まで結論を保管してきたものだった。彼女が言いたいことはつまり……。
何も言わない僕を見て、しかしそれでも構わないかのように彼女は話を続けた。「私たちには自分が無い。それは即ち、私たちは周りの思うように流されているということを意味する。ということは、私たちは生きていても死んでいても同じだとは考えられないかしら。だって、周りにほとんど干渉せずにいるのだから。では私たちは生きているのかしら。それとも死んでいるのかしら。それともどちらでもないのかしら。」
答えられない。答えたくない。その疑問は、その疑問だけは、絶対に口にすべきではない。特に僕たちのようなまがい物は。
「それは…僕たちには判断できないんじゃないかな。周りにどの程度干渉しているかなんて、僕たちに分かる分けないし。だから、月見さんのその疑問も、僕には答えられないよ。」
当たり障りのない、無難な答え。可もなく不可もないからこそ、無意味な答え。しかしこの返答こそが、月見さんのこれから言うであろう仮説の証明となることは、僕には明白だった。

「そう。答えたくないならそれでもいいわ。でも私の話は続けさせてもらうわ。私が考えるに、答えはたった一つ。生きていない、という状態。別に死んでいるわけじゃない。あくまでも生物学的にはね。でも、生きているとも言い難いでしょう。だって、私が生きていることによって周りに影響を与えることが無いなら、そんなのは死んでいるのと同じだわ。」
つまりはそういうこと。
まぁ正確に言えば、僕は別に周りに影響を全く与えていないわけではない。なんかしらは与えているのだ。しかし、その与えるものは、別に僕だけが与えられるものではない。
僕は僕自身の唯一のオリジナルだけど。
僕のオルタナティブなんて誰にでもなれる。
だからこそ、生きていても、死んでいてもどっちも同じ意味なんだ。
「さっきの私の意見を聞いた上で、もう一度あなたに聞くわ。私達は果たして生きているのかしら。それとも死んでいるのかしら。」
彼女は余裕のある目で、確信を持った表情で、僕に聞いてくる。僕は答えなければならないのだろう。答えなくとも彼女にはわかってしまうのだろうけど、だからこそ僕の口から絶対に聞き出すだろう。だってこれは。単なる確認作業なのだから。

彼女の家からの帰り道。綺麗な満月…なんて事はなく。今にも消え入りそうな、危うげな三日月。
あの、吐き気がするような確認作業の後、軽くお茶をご馳走になって、そのままおいとまさせていただいた。自分の家の玄関の前にたどり着く。インターホンをおす。
「麗梨君…お帰り。」
「うん…ただいま。」
今にも消え入りそうな妹の声。僕にしか聞き取れないようなか細い声。
「麗梨君…今日…寂しかった…。だから…一緒に…お風呂…はいっ

て…一緒に…寝て…ほしい…。」
恥ずかしそうな妹の声。両親が早く死んだ影響か、僕が帰りの遅い日は、いつも一緒に寝てほしいと言いだす。
「うん。いいよ。」
そして僕はいつものように返事をする。優しい兄であれば誰にでも言うことのできるような、安っぽい台詞だ。
それでも妹は嬉しそうに微笑んでくれる。
その笑顔を見ると、僕が本当に優しい兄になれたような気がして…
…なんて、吐き気のするような幻想の中へといつものように逃げ込む。
僕はこうして、無印に、無自覚に、無条件に、無干渉に、無許可に生き続ける。自分の限界と、自分の見解から、これから起こるであろうお粗末な展開を予測しながら。

無意識（後書き）

次回は番外編でコメディ重視……になるはず？
それでは！
ＰＳ．感想等を頂けると、作者はむせび泣いて喜びます。是非ともご意見ご感想をください。お願いします。

無効（前書き）

さて、番外編です。媛姫視点のお話です。
女の子の心情表現が壊滅的に下手ですが、楽しんで頂けたら幸いです。

無効

告君麗梨。私の幼なじみ。中学二年生の頃のとある事件以来、私にとっては想い人でもある。
好きで好きで好きすぎて、訳が分からなくなるほど彼の事が好き。
彼になら、私のすべてを捧げてもいい。彼こそが私のすべてだと言い切ってもいい。それ位彼のことが好きなのだ。
それは高校生になった今でも変わらない。いや、むしろ想いは増してきている。もう、自分では抑えきれない程に。
しかし、彼には一つだけ欠点がある。それは、超が付くだけでは収まらない程の鈍感であるということ。
私達がまだ中学3年生だったの頃の話を、私は頭に思い浮べる。

2月14日。私と麗梨君は推薦で高校を決めてしまっていたので、周りの人の様に必死で勉強する必要はない。鷹島君はまだ決まってないみたいだから、私と麗梨君とは今は一緒にいない。ちょっと寂しいけど、でもまたすぐに三人一緒に過ごせると思う。私達は親友なのですから。
とはいっても。今日に限っては、鷹島君がいないことに感謝する。なんといっても今日は……バレンタインデーなのだから。
今は昼休み。給食も終わって、今は麗梨君と一緒に図書室にいる。この図書室は死角が多く、人も少ないので、誰にもばれずにチョコを渡すには最適な場所。
そして今日、私は彼にチョコを渡して……告白する。この積もりに積もった想いを、ついに解放するの。「石崎さん、どうしたの？図書室なんかに連れてきて。」
予想どおり、彼はそもそも今日が何の日なのかも知らないようだった。
「今日は…その…麗梨君に渡したいものが…ありまして…。」

「僕に渡したいもの？」
いつもの綺麗な目で私を見てくる彼。あ～、もうたまりません！
「チョコです。今日は…その…バレンタインデーですから。」
そう言って私はポケットからチョコを取出し、彼に渡す。
「え？そうだったっけ？…うん、ありがとう石崎さん。おいしく頂くよ。」
チョコを受け取り、嬉しそうに彼は微笑む。ああ、むしろ私が彼をおいしく頂きたい！……いや、そうではなくて。
「それと…あなたには…伝えたいことが…ありますの。」
なるべく雰囲気を真面目にして話す。それを察してくれたのか、彼も真面目な顔つきになる。……その顔も食べちゃいたいくらい可愛い！告白なんかせずに今この場で襲っちゃおうかしら。幸いあまり人はいないし…。
「石崎さんどうしたの？急に真面目な顔つきになったと思ったら、今度はすごい笑顔だよ？」
「へ？い、いえいえ、そんなことはないよ？」
危なかった…。危うく獣になってしまうところだった…。改めて言い直す。
「えっと…私…麗梨君のことが…好きです…。」
恥ずかしさで顔が赤いのが自分でも分かる。手は握りこぶしにしてないと、とても耐えられない。
彼の方を見てみると、彼の顔はきょとんとしたものから、一変して満面の笑みへと変わった。
「うん、僕も石崎さんのことが好きだよ。だからこれからもよろしくね。」
…まぁ分かっていました。麗梨君となら、絶対友達として、なんていうお約束な展開になるんだろうなんてことは。でもいいじゃないですか、少しぐらいこっちの気持ちを読んでくれたって！恥ずかしいからあまり言いたくなかったのに…。「…えっとですね、麗梨君。私は麗梨君のことが、異性として好きなんです。麗梨君のことを、

一人の男性として見ているんです。」流石にいくら鈍感な彼でも、ここまで言えば分かるでしょう。その証拠に彼の表情も驚愕をあらわにして…。
「何言ってるのさ石崎さん。僕は石崎さんにしてみれば異性なんだし、一人の男性なんだから、当たり前じゃないか。そんなこと言ったら、僕だって石崎さんのことを異性として好きだし、一人の女性として見てるよ？」
「……。」え、何ですの、これ？彼は今誰としゃべってるんですの？あ、なんか、昨日一生懸命作ったチョコとか、今日のシチュエーションのために徹夜したのにとか、いろんなことが頭の中で走馬灯のように…。
あれ、おかしいですわね、なにやら目眩が……。

目を覚ますと、私は保健室にいた。
「石崎さん、起きた？」
私が寝ているベッドの横には椅子に座っている麗梨君の姿があった。
「石崎さん、いきなり倒れたから僕びっくりしたんだよ？」
「すみません、麗梨君。」まぁ倒れた原因はほとんど彼にあるのだけれど…。
「いや、石崎さんが無事で良かったよ。えっと、ごめん僕もう帰らなくちゃ。今から一緒に帰る？」
「すみません、今からはちょっと…。」
「うん、わかった。無理しないで、気を付けて帰ってね。それじゃまた学校でね。」
彼は保健室を出て行った。…別に体に異常は無いけど、流石に彼と一緒に帰れる程の心の余裕はなかった。「はぁ……。」
思わずため息がでる。今日のためにいろいろと準備してきたのに、それも全部パー。それどころか、こちらの気持ちを悟ってすらもらえなかった。少し泣きそうになってくる。
その時、ガラガラと保健室の扉が開く音がした。

「よう、石崎。昼休み中にぶっ倒れたって？気分はどうだい元気かそうかそうかそりゃ良かったところで俺見舞いの品とか何も持って来てないけどいいのか麗梨と二人っきりで何してたんだよこのこの隅に置けねーな！」
鷹島謙一。私と、彼にとって親友にあたる。
「鷹島君…。来てくれてありがとうございます。でも申し訳ありません、私今一人になりたいんですの。」はっきり言って、いまこの男のテンションに付いていく気力はない。
「なんだよー、友達だろ？寂しいこと言うなよ～。」「あのですね、私は本気で……。」
「麗梨のことか？」
鷹島君はにやりと、すべてを知っているかの様な表情で言った。
「え？な、何のことですの？」
「しらばっくれなくてもいいぜ石崎。お前の様子を、親友の俺から見れば一目瞭然でわかんだからよ…。お前が麗梨のことが好きなんだって事ぐらい。」
鷹島君は楽しそうに笑って言った。
「…一体いつから知っていたんですの？」
「去年のあれ以降からかな。明らかにおまえの麗梨に対する態度が変わってたし。まぁ親友たる俺じゃないと見抜けなかったみたいだけどさ。……だから安心しろ、おれ以外に知ってる奴はいないからさ。」
なおもにやにやしながら鷹島君は話す。
というか、知っていたのに今まで何の手助けもしてくれなかったんですのね。もし、彼の親友の鷹島君の協力があれば、今日の展開も変わっていたかもしれませんのに…。そう思うと、なんだか鷹島君に対して殺意が沸き上がってくる。
「そ、そんな怖い顔で睨むなよ石崎。…確かに今までなんも手伝わなかったのは悪かったけどよ…。でもそのお詫びに、今日は俺もおまえに情報をプレゼントしに来たんだから、な？それで勘弁してく

れよ。」
「情報？どんな情報ですの？」
「告君麗梨のタイプの女性なついてさ。」
「！！！！」
それは是非とも知りたい情報だ。なんせ彼は普段全くそういう話題に乗ってこなかったので、そのへんの情報は未知の領域なのだから。
「クックッ、やっぱ知りたいみたいだなぁ。いいぜ、教えてやるよ。あいつの好みのタイプは…」
「好みのタイプは……？」「ズバリ！あいつは同性愛ｓｈ「はぁぁぁ！！！」
鷹島君が言葉をいい終えぬうちに、鉄拳制裁して黙らせる。
「い…石崎…手加減しろよ……。」
頭から血を流しながら、私を泣き顔で見てくる鷹島君。
「知りません。あなたが乙女の純情を踏み躙ったのが悪いんです。」
「そんな冷たい声で…言わなくても…。」
しかし、本当に腹がたってきたきたのでもう帰ることにする。
私が保健室を出て行こうとすると、
「石崎…。」
鷹島君に呼び止められた。「何ですか、鷹島君？」
「さっきは冗談であんな事言ったけど、これからは協力しようとは思っているから。明日からは任せろ。」「分かりました。頼みますよ？」
そう言って私は保健室を後にした。やはり鷹島君は私の親友だったな、なんて当たり前のことを改めて理解しながら。

鷹島Ｓｉｄｅ

「ふぅ…。」
石崎が出ていくのを確認してから、俺は立ち上がりベッドに腰を掛ける。

石崎は麗梨の事が好きだ。そして麗梨も石崎の事が嫌いなわけではない。別に、付き合っても問題が無いように思う。……あいつが普通だったなら。
麗梨は、とても不思議な奴だ。いつもにこやかに過ごしているし、周りに溶け込んでいる様に見える。しかし、それは違う。あいつは周りに溶け込んでなんかいない。
はっきり言うが、俺はあいつの本当の笑顔を見たことが無い。もう１０年近い付き合いだってのに、あいつの心の底からの笑顔を俺は知らない。…いや、正確に言えば、あいつのご両親が亡くなるまえはまだ普通だった様な気がする。
俺が思うに、あいつには感情が欠如しているんだと思う。人として大切なものが、少し足りないのではないかと思う。例えば、あいつは周りからは鈍感鈍感言われているが、あいつは鈍感なのではなく、好きという感情を知らない。ゆえに誰も愛さない。だからあいつにはこちらの好意が伝わらないのだ。
しかし、大切にはする。友達が困っていたら助けようとするし、友達が傷つけられたら、自分のことの様に悲しむ。
好きにはならないけど大切にはする。そんなあいつが石崎とまともに付き合えるとは思えない。
だから、石崎には悪いが、小さな協力はしつつ、石崎が一歩踏み出そうとしたら、妨害する。こうすることで、石崎が傷付かないようにする。そうすることで、最低限の現状維持には努めようっつーわけだ。
考えただけでしんどそうだが、そこは親友パワーでなんとかするさ。もちろん、麗梨が俺から見てもまともになってきたら、あとは石崎の好きにさせるさ。いや、それどころか石崎に協力するな。あいつらぶっちゃけお似合いだと思うし。
麗梨の問題は…悔しいけど俺にはどうしようもない。あいつが助けを求めてきたら、それに応じてやるぐらいのことしかできない。偉そうに親友とか言っときながら、実は俺にもあいつのことはよく分

かんない。ただ一つ分かんのは、あいつは俺にとって最高の親友だってことぐらいだ。そのことさえはっきりしていれば、あいつが俺の親友だってことは揺るがない。例えよく分かんない奴でも、そんな事は些細な問題だしな。さて、今後の方針も決まったし、この鷹島謙一、現状を最高に楽しませてもらうかな。

現在の媛姫Ｓｉｄｅ

結局あの日は何の進展もなかったけど、それでも私は彼に告白したという事実は変わらない。彼がいくら鈍感という強固な壁で身を守り、こちらの想いに気付いてもらえなくても、私は諦めない。彼が私を友達として見れなくなるその日まで。

「麗梨、覚悟なさいね。」過去を振り返って、私は新たな決意をした私は、想いを目一杯込めて愛しい人の名を呼んだのだった。

無効（後書き）

さて、コメディ重視とか宣った割りには結局シリアスが入っているうえに、ギャグもあまり面白くないという今回の番外編。呆れて言葉もありませんね。はぁ……。

さて、次回からは本編に戻ります。それでは。

無限（前書き）

投稿かなり遅れました。すいませんでした。
ＰＳ　ＰＶが１３０００越えました。ありがとうございます！

無限

信頼という言葉がある。信じて頼る。頼る故に信じる。信じられるが故に頼られる。どういう意味で使われるのかは時と場合によると思うけど、概ね前述した通りの意味ではあると思う。僕には最も似付かわしくない単語だし、そもそも僕に対して使うべき言葉ではないのだろう。

しかし人間生活において、最も必要なものではある。というよりは、人間生活において自然と発生するものなのだろう。なぜなら、そもそも誰からも信頼されないという生活は不可能に近い。人は誰しも、何かに期待してしまうからだ。そして期待が信頼に変わるのはそんなに困難なことではない。むしろ自然だ。そんな簡単な変化を味わずに生きていけるのは、僕や月見さんのような化け物だけなのだろうから。

だから、僕は無理矢理にでも信頼を得ようとした。自分が化け物であることを周りに知られたくなかったから。誰からの頼みも断らず。誰からの悩みも受け入れた。そうして僕は、少しずつだけど信頼してもらえるようにはなったけど、その先に待っていたのは地獄だった。皆は僕の事を良い奴だの善人だの言ってきたのだ。

その当時の僕はとても混乱した。なぜなら、それらの形容詞は僕には圧倒的なまでに不適切だからだ。正反対どころか、そもそも次元が違うと思う。それなのに、皆は僕を頼ってくる。そんな事をされるたびに、僕はなんとなく居心地が悪くなって、それでも僕は皆にさらに頼られるように努力する。そんなことの繰り返しだった。まさしく無限地獄だった。

高校に入学してからはそんな事はなくなったが、中学からの友達からはよく頼み事をされる。今回の一件は、そんな下らない幻想のような、吐き気のするまやかしのようなものが原因だったのかもしれない。

「麗梨君…朝…起きて…。」
いつものように妹に起こされて、いつものように大きく伸びをする。
「静香…おはよう。」
「おはよう…ございます…麗梨君…。朝ご飯…出来てるので…準備ができたら…下へ降りてきてください…。」
そう言い終えると、妹は部屋を出ていった。
僕も制服に着替えて部屋を出る。
リビングには既に朝食が並んでいた。今日は和食中心のようだった。
妹は既に席に着いて待っていた。
「待たせちゃったかな…ごめんね？…それじゃ食べようか。」
「うん…。」
そして手始めに味噌汁に手を付ける。朝の味噌汁を飲んだときの安心感が好きだからだ。
そして味噌汁に口をつけたとき…世界がとまった。
「麗梨君…どうしたの…？」
ぴくりとも動かない僕を不思議に思ったのか、妹が尋ねてくる。
「静香…この味噌汁…。」「え！？もしかして…おいしく…なかった？」
妹が不安そうに聞いてくる。
「美味すぎるよ！どうしたの？急にすごくレベルが上がったと思うんだけど！」いつもの妹の料理もかなりの出来だけど、今日のはまた格別だった。昨日の夜まではいつものおいしいおいしい料理だったのに、何があったんだろうか。
「昨日の夜…携帯で…料理について…調べてたら…おいしい味噌汁の…作り方を…見つけたの。」
いきなり作ってこの出来だなんて…わが妹ながらすごいな。
「静香は本当に料理がうまいよね…。お嫁さんに欲しいくらいだよ。」
「！！！」

とたんに妹の顔が真っ赤になった。……少し冗談がすぎたかな？
「冗談だよ静香。僕は実の妹と結婚なんて絶対ないからさ。」
「え……？うん…。」
今度は急に元気がなくなった。何なんだろう？

朝食を食べ終えると、僕は洗面所で顔を洗って歯を研いて、玄関へと向かった。「麗梨君……。行きましょうか……。」
朝食の時以来妹はずっとこの調子だ。何かあったのか聞いても、心配ないの一点張り。僕にはどうしようもない。
重苦しい空気のまま学校へ向かう。
しばらくするとまたドドドドド～～～～！！という音が聞こえてきた。
「ごきげんよう、麗梨、静香。」
「おはよう、媛姫。」
「おはよう…ございます…石崎さん……。」
「あら、静香、元気ありませんね。どうしたんですの？」
「……心配ないです……。」
絶対心配なくない声で返答する妹。
「ところで麗梨。今日お昼私は一緒に食べられませんのでよろしく。」
「へぇ、また部活？」
「ええ…。とはいってもサボるのもありとは思うのですけれど。」
途中から媛姫が来たおかげで、なんとか重苦しい空気も和らいだ。よかったよかった。

さて、昼休み。鷹島と弁当を食べた後、急な昼練習が入ったため、鷹島は教室を出ていった。暇なので席で読書をしていると。
「告君はいるか。」
誰かに呼び出された。
「僕ならここだけど？」

そう言って声のしたほうを見てみると。
「久しぶりだな告君。ちょっと頼み事をしたいのだが。」
この月夜見(つくよみ)高校の生徒会長が立っていた。彼女がいる教室の出入口まで移動する。
「用事って何かな、霧断さん。」
彼女は霧断聖美(きりたちきよみ)さん。僕と同じ高校二年生だ。赤髪長髪で、きりっとした目に、ただならぬオーラすら感じさせる佇まい。人の上に立つ事が定められた、人が下につくことが定められた者にしか持つことが出来ないような雰囲気。女王とか女帝とかいう言葉がこれ程似合う人も珍しいと思う。
彼女とは中学からの付き合いだ。とはいっても友達とか、少なくとも親しい間柄ではなく、よくこうした頼み事をされていた。そのせいか、高校に入っても極たまに頼み事をされる事があるのだ。
「実は今日生徒会会計が休みでな。その仕事を代わってもらいたいのだが、構わないか？」
「いいよ、全然。」
「そうか、すまない。急に口裏を合わせられる人間が君以外に思いつかなかったからな。正直断られたらどうしようかと思ったよ。ではまた放課後に、生徒会室に来てくれ。頼んだぞ。」そう言って彼女は出ていった。
……中学の時に失敗したことは分かっているのに、それでも同じ事を繰り返す。人の頼みをきくとさらに信頼されて、息苦しくなる事は分かっているのに、それでも断ることが出来ない。僕はお人好しなのだろうか。いや、そんなはずがない。僕には自分がないから、そもそも相手の言うことに意見しようなんて考えが浮かばないだけだ。本当に終わってるなぁ。
放課後。僕は早速生徒会室に向かっていた。すると。「告君麗梨！！」
背中から呼び止められた。僕の知り合いで僕のことをフルネームで

呼ぶ人は一人しかいない。
「何かな、天津さん？」
案の定、後ろに振り返ると天津さんの姿があった。
「いや、これから部活にいこうと思ったら、あんたがいたから声かけただけよ。珍しいじゃない、あんたがこの一年生の階にいるなんて。」
「ちょっと生徒会室に用があってね。」
「生徒会室？あなた生徒会に入っていたのかしら？」「いや、違うよ。生徒会長とは面識があってさ。手伝いを頼まれたんだ。」
「ふーん……。」
そう頷いてから、天津さんは少し考えた後、顔を上げて言った。
「だったらさ、今日一緒に帰らない？」
突然の誘いだった。確かに生徒会と部活はほぼ同時刻に終わるから無理ではないけど……。
「天津さん、友達と帰らないの？」
そう言うと天津さんは気まずそうに、
「えっと……陸上部には友達がいなくて…。」
と言った。
先輩から嫌がらせを受けているのだ。その影響で、同学年から遠ざけられているのかもしれない。だとすれば、その責任の一端は僕にあるのかもしれない。あの時の、自分のことしか考えていない愚かな言動の影響も少なからずあるのだろうから。
「わかった、いいよ。一緒に帰ろう。」
そう言うと天津さんは嬉しそうに笑った。
「それじゃ、終わったら正門の前ね。」
「うん。じゃあまた後でね。」
そう言って僕はその場を後にした。

生徒会室内。僕より早く来ていたのが霧断さんと書記と副会長。書記と副会長さんは僕と同じ2年生だ。

「告君、よく来てくれた。まずはその机のうえの書類を整理しといてくれ。」
「了解。」
そう言って僕は早速仕事にとりかかる。

「霧断、いいのか？彼は部外者なんだろ？それに会計の仕事って大変なんだぜ？何も知らない素人に出来るとは思えないんだが。」
副会長が言った。
それを聞いて彼女は軽く笑いながら言った。
「フッ、まぁ見ていれば分かる。彼の有能さがね。」そんな会話をしている間に、山積みだった書類がもう半分にまで減っていた。
「なっ…速すぎだろ…。」副会長は明らかに困惑していた。この高校の生徒会は、主に成績で決まる。どんなに生徒会に入りたくても、かなり高い成績をとらなければ、そもそも生徒会に立候補できないのだ。
だが逆に言えば、生徒会に入っている人はエリートぞろい。そのエリートですら一日かけてやっと終わる作業を、彼は僅か１０分足らずでもう半分終わらせたのだ。
「いや、待て。内容が適当なんじゃないのか？」
横から書記が口を出してきた。
「なら確かめてみればいいさ。」
そう言って霧断は告君が書き上げた書類から一枚引き抜き、二人に見せた。
「な…何だこれ！？」
そこには完璧な報告書が出来ていた。一つ一つの課題に対する問題点から、この先につながるような奥の深い予算立案まで、たった一枚の紙にびっしりと書かれていた。
「はっきり言って彼は、この私を優にこえる程の才能の持ち主だよ。ここまで差をつけられると、悔しいという感情すら浮かばないな。」
唖然とする二人に、霧断は笑いながら言った。

ふう、終わった。僕がここに来てから２０分。山の様にあった書類はもう無かった。
「霧断さん、終わったよ。」
「ああ、ご苦労だった。後一人来るまで休んでいてくれ。来たらすぐに会議を始める。」
そう言われたので、遠慮なく机に突っ伏す。
それから少したつと、遅れていた人が入ってきた。
「すいません、遅れました。」
「やっと来たか…。それでは始めようか。今日の議題についてだが……。」
流石エリートで固められた生徒会だ。僕のような素人には言うことが無い位よく話し合っていた。互いの意見を食い潰さず、自分の意見に相手の意見を取り込みながら、自分の意見をより完成度の高いものにしていた。
「さて、これにて本日の生徒会は終わろうと思う。お疲れさま、皆解散してくれて構わない。」
霧断さんの合図と同時に皆生徒会室をあとにした。そろそろ僕も帰るかな、なんて考えていると。
「ああ、告君。君はもう少し残ってくれ。大事な話がある。」
霧断さんに呼び止められる。
「大事な話って何ですか？」
僕が聞くと、霧断さんは真剣な目つきで僕の方を見て言った。
「告君。生徒会に入ってみる気はないか？」
「え！？」
急な提案だった。
「僕が生徒会に？」
「そうだ、君が入ってくれれば、仕事の効率もかなり上がるだろうしな。生徒会長である私が推薦すれば、簡単には入れるだろうし。もちろん、今すぐ答えをくれとは言わないが、今週中には考えてお

いてくれ。それではまた今度な。」
そう言って霧断さんは生徒会室をあとにした。僕は何が何だか分からなかった。
正門前。すでに天津さんは待っていた。
「遅いわよ告君麗梨。私を何分待たせてんの？」
「ごめん、天津さん。」
部活が終わった後だからだろうか、天津先生さんは体操服姿で待っていた。
「まぁいいわ。さ、帰りましょうか。」
そう言って、天津さんは歩きだした。
そこからは、普遍的な会話だった。先輩と後輩の関係にあるとはとても思えない、とても普通な会話だった。
「ところで、あんた今週の日曜は暇？」
「まぁ特に予定はないけど…。」
「だったらさ、その…一緒に…映画に行かない？」
「別にいいよ。」
特にに予定もないしね。
「本当！？約束だからね？破ったら筋肉ドライバーの刑だから！」
女の子らしからぬ罰だった。
「なんで筋肉バスターじゃなくてドライバーなのかは分からないけど…大丈夫、破ったりなんかしないよ。」
そんな約束をした後、僕達は分かれた。

藍満ｓｉｄｅ

告君麗梨。彼は、私が知るなかで、最もやさしい先輩だ。以前私が先輩に出くわしたときも、私を助けてくれたうえに、心配までしてくれた。そんなことしてくれるのは、家族以外で初めてだった。
この高校で、私に友達はいない。
先輩の影響からか、誰も私に話し掛けてくれなかった。寂しいし、

学校にだって来たくない。でも、学校に行けば彼に会える。私が部活でどんな扱いをされているのか知った上で、それでも私に味方してくれる彼に会える。そう考えるだけで、私の心はいっぱいになった。これが恋と言うものなのかもしれない。
私は彼が好きなのかもしれない。いや、間違いなく好きのだろう。彼と一緒にいたい。自然にそう思えるから。私は今日も彼を思いながら眠る。

無限（後書き）

今回からは生徒会編に入ります。誰かに期待してもらえるような、たいした話は作れませんが、それでも応援していただけると嬉しいです。よろしくお願いします。

無意味

僕には友達がいる。僕の周りを彩る、僕にとってはかけがえのない友人たち。言うまでもなく大切だし、言葉にする必要もなく親切だ。しかし、あの人たちがいつも喋っている相手は僕ではない。当然だ、僕は友達相手に嘘を吐いているのだから。だから、彼らが友達だと思っているのは飾り付けられた偽物の僕であって、化けの皮をかぶった見せ物の僕なのだ。そう考えれば、僕に友達などいないのかもしれない。いや、きっといないのだろう。いるわけがない。友達がいないのだから親友もいない。

僕はずっと独りだ。本当の自分を皆に見せていないのだから、そんなのは当たり前だ。自分を曝け出さずに、それでも自分を理解してくれだなんて、吐き気のするような我儘にすぎない。かといって、自分を曝け出せば、周りからは間違いなく疎外されるだろう。当たり前だ、僕はイカれたポンコツなのだから。皆僕を気持ち悪がるに決まってる。実際僕だって自分のことが気持ち悪い。

そんな僕が生徒会に誘われるだなんて、世も末としか言いようが無いな。

霧断さんに生徒会に誘われた次の日の昼休み。僕は屋上に来ていた。媛姫も鷹島も今日も部活の昼練習があるそうだ。そんなわけで屋上で1人で昼御飯を食べていると。

「あら、待たせたわね。」月見さんが来た。いつもどおりの無表情で、いつもどおりに無感情な声で。

「別に待ってませんよ。」僕がそう言うと、月見さんは僕の隣に座って、あらそう、と頷いた。

「最近見かけないと思ったら、また急にこんな所に来るなんて。どう、あなたの学校生活に何か変化はあったかしら。」

これは間違いなく嫌味だろう。彼女が僕自身であるのだから、僕が

変化などすることは出来ないだなんて事、彼女には分かっているはずなのだから。
「さぁ、どうでしょうね。僕には分かりません。……変化かどうかは知りませんけど、生徒会に誘われはしましたよ、一応。」
そう言うと、月見さんの時間が停止したかのように、箸を動かす手がとまった。「え…？生徒会…？あなたが…？……ぷっ、アハハハハハハハハ！」
そして大爆笑。…まぁ予想はしてたけどね…。
「…失礼だとは思いませんか？」
「フフッ、ごめんなさい、あなたがとてもおもしろい夢物語を聞かせてくれたからつい、ね。」
まぁ自分でも滑稽だとは思っていたけれど、月見さんに笑われるとどうもな…。まぁ、僕と同類である月見さんだからこそ笑うことが出来るのかもしれないけれど。
「それで、どうするの？入るの？生徒会？」
漸くおさまったのか、いつもの余裕ある笑みを讃えながら、月見さんは聞いてきた。
「それはまだ決めかねてますけど…月見さんならどうします？」
「私だったら？そうねぇ……。」
そう言って考えること数分。
「入るわね、生徒会。」
「へぇ、それはまた以外ですねぇ。あなたなら断ると思っていたんですけど。」そう言うと、月見さんは心外だと言うように僕を睨んできた。
「それがどういう意味なのかは聞かないでおくけれど…そうねぇ、理由ぐらいは話してもいいでしょう。」そう言って彼女は一拍おいて、
「実験のためよ。」
と、いつもどおりの無表情で無感情に言った。
「実験？何のですか？」

「私のような人間未満が、果たして校内の生徒を導くことが出来るのかどうかについてのね。」
成る程。確かにそれには僕も興味がある。何よりそれ程面白い光景もないだろう。ニュアンスとしては、ネズミが猫を先導する様なものだ。滑稽極まりない。
「というか、あなた私の意見なんて聞かなくても、もう決めてるんじゃないの？…いや、これは言い方が悪かったわね。あなたもう自分がどうするのか分かっいるんじゃないの？」
確かにそうだ。月見さんの意見を聞くまでもなく、僕の意志なんか関係なく、僕が生徒会に入ることなんて分かり切っていた。僕に意志なんかないから。周りに要求されたら、その通りにする僕に、意志なんてあるはずが無いのだから。
「まぁそうなんですけどね。興味本位ってやつです。気分を害したのなら謝ります。」
「別にそんなことはないけれど…まあいいわ。ほら、そろそろチャイムがなるわよ。戸締まりは私がしておくから、あなたはもう行きなさい。」
そう言って月見さんは立ち上がった。
「そうですか…では、よろしくお願いします。」
僕も言われた通り屋上をあとにした。

放課後なった。
「麗梨、今日は一緒に帰りませんか？」
「別にいいよ。」
媛姫からこの誘いを受けるのも久しぶりだな…なんて考えながら媛姫と一緒に下駄箱へ向かう。そこから正門を出ていつもの帰り道へ向かう。
「そういえばテストももう二週間前だけど、どう？もう勉強始めたの？」
「それなりに…といったところですの。まぁまだ本格的には始めて

ませんわ。」普通の高校生が過ごす普通の時間。媛姫は楽しそうに笑っている。きっと本当に楽しいのだろう。僕なんかと過ごす時間が。それに比べて僕は。今この時間が苦しくてしょうがない。
「麗梨？聞いてますの？」「！あ、うん。聞いていたよ？」
媛姫から疑いのこもった目で見られる。……怖い。
「まぁいいですわ…。また最初から言います。」
そう言って媛姫は呆れたように大きくため息を吐いたあと、また口を開いた。
「麗梨は、その…身近に自分の事が好きな人はいると思いますか？」
そんな人いないよ。僕の身近な人に限らずね。だって自分が無いんだから。そんなやつのことを好きになれるわけがない。
「どうだろう…僕には分からないかな。」
ほらみろ、またそうやって自分の意見を出さないんだろう？曖昧な返事で自分の正体を隠すんだろう？だから僕には何もないんだよ。
「…それじゃあ、仮にいるとしましょう。そしてその子が告白してきました。その時麗梨が断った場合、その子とそれまで通りの関係でいられますか？」
それはおそらくは僕にあまり関係の無い質問。その質問に答えたところで、意味なんかないのだろう。
だって、そもそも前提条件があり得ない。僕に告白？僕の事が好き？吐き気がする。僕はまだ誰かに好かれるだなんて幻想を抱いているのか？バカらしい。
「僕は…」
それでも僕は自分を隠すだろう。自分を偽るだろう。自分に偽るだろう。今までだってそうしてきた。これからもそれが変わることはない。僕はそういうものなんだから。
「僕はたぶｎ「麗梨～～～～～！久しぶり～～～！」急に背後から声がしたので振り返ってみれば、そこにいたのは鷹島だった。
「久しぶりって…さっき学校で会ったばかりだろ？」「そんなこと言うなよ麗梨～。ところでさ、さっき部活の先輩にお前には才能が

あるな、盆栽の。なんていわれたんだけどさ、これってすごい言葉だよねだって盆栽と凡才の掛詞だぜ思わず先輩に言ってやったよ凄いですねってさ。」
…鷹島、それは暗に部活やめろって言われてるんじゃない？
ていうかさっきから背後から出てる殺気を感じていない鷹島の方が凄いと思うよ…？
「た～か～し～ま～さ～ん？」
「ひ、ひぃ！？」
あ、後ろから頭を掴まれた…。
「あなたはどうしていつもいつも私の邪魔をするんですの～？」
「ええっと、わたくしめは別にあなた様の邪魔をするつもりでは…ただ麗梨がいたから声かけようかな、な～んて……。」
「言い訳はいりませんわ。」
手にぐっと力を入れる媛姫。
「そ、そんな！邪魔をした理由を聞いてきたからお答えさせていただいただけですけども！」
「黙りなさい…永遠に。」その刹那。媛姫は頭を掴んだまま鷹島を後ろへ投げ飛ばした。そして遥か後方からは爆発音……爆発音！？
「それでは麗梨。行きましょうか。」
そのあとはやたらと機嫌の悪い媛姫と何も話さず帰った。……怖かったよう。

「ただいま。」
扉を開けて家の玄関へ入る。鍵は掛かっていなかったので、おそらくは妹がいるのだろう。伯母さんが来ている可能性もあるが、さすがにこんな急には来ないだろう。
「麗梨くん……おかえり……。」
それだけ告げると妹は僕の前から駆け足で離れていった。昨日から妹の様子が変な気がする。恋煩いとかいうやつだろうか。僕にはよく分からないけど。

リビングへ入るとすでに夕食ができていた。そして紙が一枚。妹の字だ。
《今日は早めに寝ます。麗梨くんは先にお風呂入ったりしていてください。それではおやすみなさい。》
ちょっと待って欲しい。まだ午後6時だよ？早すぎない？今日はよっぽど疲れたのかな。

とりあえず先にお風呂に入ることにした。
お風呂はいい。いろんな事を忘れられる。今日あった辛い事も、嬉しい事も全て。僕のがどういう存在なのかすら忘れられる。
そう言えば生徒会どうしよう。いつ参加する旨を伝えようか。いつでもいいかな。今週って言ったってあと3日もあるしね。
そろそろでようかと思ったその時。
あの衝動がきた。
そろそろ限界を感じていたので覚悟はしていたけど。「あははは っ。あはは。あはははははははっ……。」
僕は時々自分の行いがとてつもなくバカらしく思えて笑うことがある。狂った様に笑って、縋った様に笑って、困った様に笑う。
それは自分を偽る代償だろう。自分の行いに耐え切れなくなる。
つまりは僕はそういう人間なのだ。無理を積み重ねて、下劣に醜く下等に卑しく生きている。何とも無様な有様だ。
そんな状態なのに、事もあろうか僕は生徒会に入ろうとしている。
本当に下らない。吐き気がするなぁ。

無鉄砲（前書き）

ＰＶ２００００越えました。本当に読んでくださった皆さんには感謝してもしたりないです。
物語はまだまだ続きますが、どうぞこれからもよろしくお願いします。

無鉄砲

金曜日。最近は妹が起こしに来ないので1人で起床する。時計を見ると6時半。どうやら毎日妹に起こされていたから、この時間が体に染み付いているようだ。おかげで今日は遅刻せずにすみそうだ。ホント、妹には頭が上がらないな。

下に降りると、ベーコンの焼ける香ばしい香りがしてきた。キッチンを見ると、案の定妹が朝食を作っていた。

「麗梨くん……おはよう……。」

「うん、おはよう。」

それっきり何も喋らず料理に集中する妹。それはいつものことなんだけど、やっぱり何か違う気がする。いつもより暗いというか、深いというか…。

ふとテーブルを見ると、もう料理が並んでいた。

「食べましょうか……麗梨くん……。」

「え？あ、うん、そうだね。食べようか…いただきます。」

いつもより様子はおかしい妹だけど、料理の腕はいつもどおりだった。とても美味しい。

朝食を食べおわると（因みに食事の間妹は一言も喋らなかった。）、僕は自分の部屋へ着替えに行き、いつも通りに玄関へ向かう。ああ、今日は生徒会に入ることを霧断さんに伝えなきゃな、といった感じで今日の予定を振り返っているうちに、妹が来た。

「静香、用意できた？」

「はい……出来ました……。」

「それじゃ、行こうか。」「はい……。」

やっぱりなんか暗いなぁ。兄として何かできないかな？……なんてね。あるわけないだろ、できることなんて。この僕にさ。

静香ｓｉｄｅ

麗梨くん…麗梨くん…麗梨くん…麗梨くん…。
彼は言った。実の妹と結婚だなんて絶対無いって。そうだよね…。
それが世間一般の考え方だよね…。だから彼は悪くない。今私の心はズタズタだけど、彼のせいでもないよね…。
じゃぁ何でこんなに辛いんだろう。心が泣きそうなほど痛いのに、何で浮かんでくるのは何も悪くない彼なんだろう。
私は彼のことがこんなにも愛しいのに、何で彼は振り向いてくれないんだろう。……何で私は彼の妹なんだろう。私がいくら忌もうとも、何でどうしようもなく私は彼が好きなんだろう。彼のあの他人事の様な一言で、私は思い知った。私なんて、彼の視界に入ってないんだって。何の迷いもなく告げた彼は、何の罪悪感もないのだろう。当たり前だよ、彼が罪悪感を感じる要素なんて一つもないんだもの。
だけど、何で私はこんなに悲しいの？誰も悪くないのに。何も悪くないのに。
やりきれないよ…。麗梨くん…何であなたは私を愛してくれないの？答えなんか決まってるよね…。

麗梨ｓｉｄｅ

昼休み。僕は早速霧断さんに生徒会に入ることを伝えるために生徒会室に向かっていた。その道すがら。
「告君麗梨！！」
僕をフルネームで呼ぶこの声は……。
「…久しぶりですね、天津さん。」
例によって例のごとく天津さんだった。…また面倒な人に見つかったかな…。
「何よ、その明らかに面倒そうな顔は！？」
どうやら本心が顔にでちゃったみたいだな…。

「そんな事ないよ。…ところで僕に何か用事かな？」そう言うと、天津さんははっとして言った。
「そうよ、今週の土曜日の映画の話なんだけど、まだ集合場所も時間も決めてないじゃない。どうしてくれんのよ！」
クレーマーでももう少しまともなクレームつけるんじゃないかな…？
「うーん、そうだなぁ。映画は何時からなの？」
そう聞くと、天津さんは生徒手帳を取り出し、開いて見た。
「えっと、１２時からね。」「劇場はカネマでしょ？だったら、この学校の正門まえに１０時半でどうかな？」「そうね、それくらいが妥当かしら。」
そう言って、天津さんは満足そうに頷いた。
「そう。じゃぁ僕はもう行くね。」
「待って！」
僕が行こうとすると、突然天津さんは大声で僕を呼び止めた。
「何？まだ何か用があるのかな？」
僕がそう聞くと、天津さんは急に目を逸らして、顔を赤くしながら言った。
「私はもう少し話してあげてもいいというか…とにかくもう少し私と話なさいよ！」
わけの分からない要求だった。会話なんて、やれと言われてやるものじゃないよね…。
まぁわけが分からないても、結局僕はその要求を飲むのだけれど。
僕には何も無いからね。
確かに霧断さんに伝えなきゃいけないこともあるけど、それは別に放課後でもいいのに対して、天津さんは放課後は部活がある。だから後回しには出来ないからね。
「別にいいよ？天津さんはまだ僕に聞きたい事があるのかな？」
僕がそう言うと、天津さんは楽しそうに笑った。…笑ってくれた。
「それなら、えーと…どこか二人だけで話せるところがいいんだけど…。あんたどこかいい場所知らない？」

何故二人だけじゃなきゃいけないんだろ…あ、そっか。僕は2年だからこの階では目立つのか。
「それなら、ありますよ。ついてきてください、案内します。」
そう言って僕は屋上に向かう。
「ちょっと、待ちなさいよ！」
天津さんもあわててついてくる。

ピッキング成功。僕はいつもの調子で屋上の扉を開ける。後ろを見ると、天津さんがかたまっていた。
「どうしたの、天津さん？入らないの？」
「いや…。あんたって意外と悪よね。」
「？？？よく分かんないけど、とりあえず。ここなら誰も来ないよ、鍵を掛ければね。」
そう言って僕は鍵を掛けようとした時。
「あら。可愛い女の子二人を屋上に監禁なんて、変わった趣味をしているのね。」
背後から声がした。というか、よく聞き慣れた声だった。
「月見さん…いたんですか？」
「あら、失礼ね。私がここにいてはいけないのかしら？」
そう言って、月見さんは不敵そうに笑った。…本当に不適そうに笑った。
「ねぇ、その方はどちら様かしら？」
月見さんは僕の隣を見ながら聞いてきた。
「ああ、この人は天津藍満さん。1年生で、僕の…友達かな。」
あまり月見さんの前で友達なんて単語使いたくないんだけどね。…吐き気がするから。
「で、天津さん、この人は月見夜宵さん。この人も僕の…えっと、なんて言うんだろ…。」
僕は表現に迷っていた。僕自身だなんて言えないし、でも絶対友達ではないよなぁ。そんな風に考えていると、月見さんが

「私は彼の彼女よ。麗梨くんと付き合ってるの。」
とかぬかしやがった。
「ええ！？」
今まで一言も喋らなかった天津さんも、かなり驚いていた。…と言うよりは、ショックを受けていたと言うほうが正確かな？何にショックを受けたのかは知らないけど。
「あのね、月見さん…。下らない嘘を吐くのは止めてくれないかな？」
僕がそう言うと、月見さんは楽しそうに笑った。
「そうね、あからさまな嘘よ。誰も引っ掛からないような簡単なね。…もっとも、天津さんはそういうわけでもなさそうだけど。」
言われると同時に顔を真っ赤にする天津さん。…外の風に当たりすぎて寒くなったのかな？
「ふふっ、もう少しその子で遊びたいけれど、私もあまり野暮なことはしたくないわ。後はお二人でごゆっくり。」
そう言って月見さんは屋上を出て行った。
「ふう、やっと静かになったね。それで、天津さん。話って？」
僕がそう聞くと、天津さんは苛立ったように
「…もう、いいわよ。」
と小声で言った。
「え、でもさっきは話したいって……」
「もういいって言ってんでしょ！」
そう言って屋上を出て行く天津さん。…何だったんだろ？

放課後。僕は今度こそ生徒会室にたどり着いた。今はその扉の前だ。やはり少し緊張する。
「失礼します。」
僕は中に入った。
「君か…生徒会の件、答えが出たのか？」
早速霧断さんが聞いてきた。

「はい、まぁ取り敢えずは。…生徒会、入りますよ。僕に出来る限りの事はしたいと思っています。」
「そうか、わかった。…一応聞いておくが、この中に彼が生徒会に入ることに異論のある者はいるか？」
霧断さんが聞いたけど誰も手を挙げなかった。
「では先生には私から伝えておこう。とはいっても、君の正式な活動は来週からだ。それまでは別に仕事は無いので、ここに来る必要はない。」
「分かりました…それじゃあ一旦僕は帰りますね。」「ああ。来週からよろしく頼む。」
「はい、こちらこそ。」
そう言って僕は生徒会室を後にした。

自宅。
「麗梨くん…おかえりなさい…。」
家に帰ると、比較的妹はいつも通りになってきた気がした。少しだけど安心した。
「うん、ただいま静香。」「お風呂…沸いてるし…出てきたらすぐ…ご飯も出来ると思うから…。」
「わかった。本当、いつもありがとうね。」
僕は最大限感謝の意を込めてお礼を言う。
早速お風呂に入ることにした。

「ふ～～～…。」
気持ちいい。極楽極楽とはよく言ったものだなぁ。本当に天国にいるみたいだ。……そういえば今日、いよいよ生徒会に入ってしまった。うっかりミスと言うよりは、確信を持ったミスなんだけどね。これで僕の生活は少しは変わるのだろうか。うん、確かに変わるだろう。今よりも大分息苦しくなるに決まっている。僕が生徒会所属ってだけで、十分な程息苦しいのに。僕はマゾなのだろうか。いや、

違う。きっと何物でもなければ何者でもないのだろう。僕はそういう存在だ。後先考えず、ただ生きているだけ。ただ生きていくだけ。マリオネットもいいところだ。
僕はいつになったらこの苦しみから解放されるだろう。僕はいつまで生きていればいいのだろう。
分からないけれど、それでも僕には関係ないと思った。僕がいつまで生きていようが、僕がいつから死んでいようが、僕が化物であることには変わりない。そしてその事実が、僕には十分な程の絶望と欠乏を思い知らせるのだから。そこには吐き気のするような絶対的幻想が明滅しいるのだから。

無鉄砲（後書き）

さて、今更なんですが、主人公が他人の好意を理解できないってのはなかなか厄介ですね…。こんなのが主人公だなんて、そもそも恋愛小説として成り立つんでしょうか。

さて、この生徒会編、実はあと3話程続きます。

基本的には駄文しか書けませんが、こんな作者の作品でも、次も読んでいただけると幸いです。

それでは。

無難（前書き）

久々の投稿ですね。
楽しんで頂けたら幸いです。

無難

僕は弱い。いつも自らの保身の事を考えて行動している。常に自らの保身の事を念頭において考える。
これは僕がたまらなく臆病であることを示している。弱い故に強いを恐れ。臆病であるが故に勇敢を妬む。汚いが故に美しいを遠ざける。僕はこの世のありとあらゆる負の感情を持ちながら、世界を騙し騙し生きている。
いや、もしかしたら世界は僕の偽装を見破っているのかもしれない。その上で僕の姿を、僕の行動を、僕の思考を嘲笑っているのか。だとしたら、なかなか世界も捨てたものではないかもしれない。化け物の鑑賞マナーってものを、ちゃんと弁えているのだから。

土曜日の朝。
「麗梨くん…起きてください…。」
久し振りに妹に起こされた。
「うん…おはよう、静香。」
久し振りだったので、少し気まずい。次の言葉が浮かばない。
「朝食…できてますから…。」
そう言って気まずそうに部屋を出ていく妹。…それでも、朝起こしに来てくれるようになっただけでも良かったと思う。
いつも通り少し伸びをしてから、下へ降りてキッチンへ向かう。そしていつも通りのいい香り。うん、何があったのかは知らないけど、少しずつ回復してきているみたいだし、このまま何もしなくても大丈夫かな。「それじゃ静香、食べようか。…いただきます。」
うん、朝食も最高においしい。コーンスープは体を芯から温めてくれるし、ガーリックトーストの焼き加減も絶妙。本当においしい。
さて、そんな幸せな食事の後、いつものように部屋で着替えて玄関へ。今日は珍しく、妹が先に待っていた。

「麗梨くん…行きましょう…。」
「うん、行こうか静香。」そうして二人で歩きだす。ぎこちない会話ではあったけど、口も聞いてくれなかった昨日までとは偉い違いだった。
そんな風ではあっても、妹との懐かしい会話を楽しんでいたとき。ドドドドド〜〜〜！という音が聞こえてきた。
「ごきげんよう、麗梨。」「ああ、媛姫。おはよう。」
「石崎さん…おはようございます…。」
やっぱり媛姫だった。
「あら、静香さん。少しですが元気になったようですね。」
あの僅かな挨拶だけでそのことに気が付くなんて、本当に大したものだよなぁ。そんなわけで、僕は少しだけどいつもの日常に帰ってきた。…この表現なんか微妙だな…。

さて、昼休み。僕は媛姫と鷹島とでお昼ご飯を食べていた。
「そういうわけでだな、麗梨、俺が思うにディープパープルとワム！だったらどちらかと言えばＭＣハマーなわけよ俺としてはそう言えばパワポケ１２の発売を記念して現在絶賛パワポケ１０をやりこみ中！方法的懐疑を用いた結果考える私の存在は絶対である！なんつって〜。」
もはや何を言っているのか分からないレベルにまで達した鷹島。神はお前だよ…。
「鷹島さん…喧しいですわよ？」
そして鷹島の目に突き刺さる割り箸。
「ギャーーーーー！！！」鳴り響く鷹島の悲鳴。そして爆発音。……なんで！？「媛姫…最近鷹島への対応がひどくない？」
「これがデフォですわ。」媛姫に微笑み掛けられながら威圧された…。媛姫の微笑みからは純粋な善意しか感じられないのに…。
因みにその後鷹島は３時間ほど起き上がれずに保健室行きだったそうだ。保健室遺棄とも言うかもしれない。

まぁその事は置いといて、鷹島がまだ教室でのびていた昼休み。
「麗梨、明日の日曜日は空いてます？宜しかったら私と一緒に買い物に付き合って欲しいのですけれど。」何かを確信するように、何かに期待するような目で見つめてくる媛姫。その何かが僕には分からなかったけど、残念なことに明日は先約がある。
「ごめん媛姫明日はちょっと用事が…。」
「そうですか…。どんな用事ですの？」
うーん、特に変なことがあるわけでもないし話しても平気かな。デートとかでもないしね。ただ天津さんと二人で映画を観るだけだ。
「天津さんと二人で映画を観るだけだよ。」
その時だった。媛姫は手に持った箸をボキッとへし折った。
「天津さんと言ったらあの後輩で陸上部の女性の方ですか？」
媛姫は恐る恐るといった感じで確認してきた。
「うん、そうだよ。」
平然と答える僕。
「……。」
そして押し黙る媛姫。
「どうかしたの？」
「いえ…分かりましたわ。また今度一緒に買い物に行きましょう。」
「うん。分かったよ。」
なんか様子が変だけど、そこまで深刻なわけでもなさそうだし、大丈夫だろうな。

放課後。僕は図書室にいた。今日は媛姫も鷹島も部活で、一緒に帰れないから、せっかく一人なんだし、少し寄り道でもするかな、なんて考えて、僕は図書室を訪れた。特に読みたい本があるわけでもないけど、放課後の図書室には人があまりいない。いても、その人は完璧に自分の世界に入り込んでる。つまりは、僕はこの図書室という空間において、独りぼっちなんだ。一人は落ち着く。すぐに寂しくなって、一人でいるのが嫌になるけれど、少しの間だけでも落

ち着くことができる。皆といるときの僕では絶対に得られない、安心感がそこにはあるんだと思う。安心できるからこそ、怖いのだけれど。
そんなわけで僕は今本を読んでいる。題名は覚えていない。ただ本の内容から考えて、ファンタジーものだろう。
「あら、待たせたわね。」…まぁ図書室を選んだ時点である程度の予想と覚悟はしてたけどね…。
「別に待ってませんよ、月見さん。」
声をかけてきたのは月見さんだった。手には何も持っていない。僕と同じく独りになりに来たのだろうか。「ふふ、そうかしら？そんなことないと思うけれど。…隣いい？」
「どうぞ。」
僕は隣の椅子をだして月見さんにすすめる。
「それであなた、結局生徒会に入ったのかしら？」
そういえばまだ月見さんには話してなかったかな。
「はい、入りましたよ。」そう言うと月見さんは嬉しそうに笑って拍手をした。「ふふ、おめでとう。じゃあもうあなたも晴れて、学校を代表する組織の一員というわけね。」
「違いますよ、生徒会なんて学校に入学した時点で皆生徒会の仲間入りですから。」
実際そう思う。僕は偉くなったんじゃない。皆より上に行ったわけじゃない。むしろ皆より下に行ったんだ。そう思う。そう思わずにはいられない。
「確かにそうね…。それにしてもあなたが生徒会か…私も部活とか始めてみようかしら。」
「…また心にもないことを言いますね…。」
本当に。僕達は他人と関わるべきではないから。僕達と関わるべき他人なんていないから。
だから僕のだした生徒会に入るという選択肢はこれ以上ないくらい間違ってる。それをわかった上で僕はその選択肢を選択する。だか

ら僕は終わってるんだ。月見さんよりも。
「心にもない…か。確かにそうね。それなら今の私の感情も、心にもない、のかしら。」
「え？どういう意味ですか？」
月見さんは急に悲しそうな顔をした。しかしそれもすぐに元の無表情に戻り、いや、若干楽しげな顔をして「何でもないわ。」と、平然と言った。
「ところで、この前屋上に来た女の子のことなんだけど。」
この前屋上に来た女の子？……あ、天津さんのことか。
「天津さんがどうかしたの？」
僕がそう聞くと、月見さんは意地悪く笑って、
「あの娘、あなたと付き合っているのかしら。」
とか言ってきた。そういえば、なんかこの前は月見さんが僕と付き合ってるみたいなこと言ってましたね…。
「…あのですね、すぐにそういう話に持っていくの止めませんか？」
僕の進言にも耳を貸さず、ただクスクスと笑っている月見さん。…勘弁してください…。
「ふふ、まぁそこまでは冗談なのだけれど。そしてここからが本題なのだけれど。あなたが誰かと付き合うことってあるのかしら？」
これもまた直球な質問だ。というか今月見さんの中でそういう関係の話が流行っているのだろうか。
「うーん、あるとは思いますよ？ただ、あり得ないことではありますけど。」
僕が誰かと付き合う時。それは恐らく…。
「ああ、成る程。あなたが誰かに告白されたとき、というより、誰かに付き合ってくださいとお願いされた時、ね。でも自分にはそんなことないだろうから、あなたが誰かと付き合うなんてことは有り得ない、と。」
「そういう事です。」
さすがは僕自身だ、理解が早い。でも自分の事だから当たり前なの

かもしれない。いや、自分の事だからこそ凄いのかもしれない。
「本当にあなたは、受動的というか…。あなた、そっちにいて本当に楽しいの？あなたは本来、こちら側でしょう？」
そんなことはわかっている。でも仕方ない。こっちにいるかぎりは、僕はまだ人として生きていける。苦しくて辛くて痛くて気持ち悪いけど、それでも僕は皆と喜んで、皆と怒って、皆と哀しんで、皆と楽しみたい。…今それが出来ているわけでは決してないけれど。苦しくて辛くて痛くて気持ち悪いだけだけれど。
「僕は平気ですよ。こちら側もなかなか楽しいです。」
「…本当に心にもないわね…。」
どうやら見透かされていたようだ。
「もういいわ。時間も時間だから私は帰るわね。あなたと話せて、今日も楽しかったわ。それじゃぁまたね。」
「はい、また今度、月見さん。」
僕は月見さんが行ってからまた数分そこにいたけれど、特に本も読まないまま家に帰った。

いつもの家。
「麗梨君…おかえりなさい…。」
いつもどおりになった僕の妹。
「うん、ただいま、静香。」
僕はいつもどおりの言葉を妹にかけて、
「麗梨君…お風呂…沸いてるから…先に…入っていてください…。」
妹はいつもどおりに言葉を返す。
そうやってご飯を食べて、明日は天津さんとお出かけして、明後日は学校で媛姫や鷹島に会って話したり、たまに天津さんに会ったり、月見さんと話し込んだりするのだろう。あとは、生徒会の活動が新しく始まったりもする。生徒会の活動も、すぐに僕のいつもどおりになる。
僕はこんないつもどおりをなくしたくない。月見さんと話し込むこ

と以外は苦痛でしかないけれど、それでも嫌なわけじゃない。だって、僕は望んでそこにいるのだから。
だから本当に…吐き気がするんだ。

無難（後書き）

感想などお待ちしています。

無策（前書き）

またまた久しぶりの投稿です。…すいませんでした。

無策

僕の望みは何だろう。何にしたって僕の望みが難だろうということは分かり切ってはいるけれど。
おそらくは現状維持。でも、そんなのは不可能だ。いずれ僕は壊れる。いずれ僕は壊す。そんなことは分かり切っているのだから。
そう考えると、現状維持が本当に僕の望みであるかは難しいところだ。叶わないことが明らかな望み。叶わないことが前提である望み。僕自身が諦めた望み。僕自身を諦めた望み。そんなもの、僕は本当に望んでいると言えるのだろうか。それとも、叶わないから、諦めたからこそ望んでいると言えるのかもしれない。
どちらにしたって、僕の望みが叶わないことは確かなことではあるけれど。

日曜日の朝。妹に僕が今日出かけることを伝えて家を出た。１０時半に学校の正門前なら、今の時間なら十分に間に合うだろう。いや、寧ろ早すぎるくらいかもしれない。そう思ったので少し歩くペースを遅める。
今日は日曜日なので全然人がいない。人っこ一人いないわけではないけど、でも平日の朝生徒がそこらじゅうにいる光景を知っている僕にとってはいないと言い切ってしまえる程度の人数だ。だからだろうか、とても落ち着く。それ故に吐き気がしてくる独りというのは本来、恐くて寂しい。僕もその例外ではない。けれど、僕の本能が孤独を求めている。安定を求めて、安寧を求めて、つまりはあらゆる障害の排除を求めている。でも僕にとって障害とは、僕を含めた全ての人間であって、ということは、僕は今死を望んでいるのだろう。本能的には。
それでも死ぬのが怖い、というより、人であるからには死は恐怖でなければならないと定義付けている僕の理性が、死を喜んで受け入

れることを善しとしない。死ぬことを、独りになることを望んでいるのを知っていながら、本当は僕はそんなこと望んでいないと僕自身に言い聞かせる。阿呆らしい。
そんな自己否定の様な、自己確認の様な、まとまりがなくてとりとめのない思考をしていると、いつの間にか学校の正門の前だった。時計を見るとまだ約束の5分前。丁度良かった、なんて思っていると、
「告君麗梨！」
朝からいきなりハイテンション&フルネーム。こんなことが出来るのは僕の知人に一人しかいないし、仮に違う人がいたらリアクションに困るだけなので、つまりは彼女が来たということだろう。
「そんな大声じゃなくても聞こえてますよ、天津さん。」
まぁ当然というか、自然というか、そこにいたのは天津さんだった。特徴的なピンクのショートカットに、何というか、うん、お洒落な服を着ていた。
「へ〜、私を10分も待たせておいて出てくる言葉がそんなものだなんて、いい度胸じゃない。」
…これは嫌な予感。
「えっと、僕も一応待ち合わせ時間には間に合いましたよね…？」
そう言うと、天津さんは実に愉しそうな笑みをうかべて、
「私を待たせるなって言ったわよね？」
と告げた。…それなら最初から集合時間じゃなくて、天津さんが来る時間を教えてほしい…なんてことを言っても無駄だということは分かり切っていることなので、ここは諦めることにした。
「分かりましたよ…それで、望みは何ですか？」
ここまで僕に文句を言ってきたんだ、天津さんがそれをネタに、僕に何かを要求してくることは明らかだし、無駄な抵抗は止めて下手に出るのが得策だと考えた僕。
「何か急に大人な態度になったのがムカつく。」
「天津さんに逆らったわけでもないのに、その言い草はあんまりじ

ゃないですか…？」
滅多に泣かない僕でも、いまなら頑張れば泣ける気がする…。
「まぁいいわ。そうね、要求は…。」
言い掛けて天津さんは僕の顔をじっと見てきたかと思うと、少し視線を外して僕の手を見てきた。
「わ、私と、手を…。」
「手を…？」
そして数秒の間。
「私と手をつなぎなさい！」
そう言うと天津さんは顔を真っ赤にしながら、少し汗ばんだ手をスカートで拭ってから手を差し出してきた。天津さんは命令口調なのに、その姿はさながら手をつないでくださいとお願いしているようで、そう思うと少し頬がゆるんでしまった。
「いいですよ。」
要求の意図はわからなくとも、確かに天津さんを待たせたのは事実だし、別に僕は手をつなぐのが嫌だなんて言う程極度の潔癖症でもない。それより何より…そもそも僕に自分の意志など無いのだから。
「何笑ってんのよ、ムカつくわ…。」
顔を赤らめ俯いたままいつもの憎まれ口をたたく天津さん。
「それは申し訳ありませんでしたね。」
そう言って、僕達は歩きだす。見た目は細く頼りない手に、これまた僕の頼りない手を重ねて、相手の手を柔らかく握りながら。ちょっとしたことで離れてしまうことは明らかな、それでもこの手が離れることはないのだろうと確信しながら。

しかしそれとは別に、僕にはもう一つ別の確信があった。それは、僕は天津さんに対して、僅かな親しみも、遥かな憎しみも、ほのかな好意も、密かな敵意も、何一つとして抱いていないということだった。吐き気がする。やっぱり天津さんも僕にとっては障害でしか

なくて、それでも僕は自ら望んで天津さんと一緒にいるのだから。
本当に、勘弁してほしい。僕自身にも、周りの人たちにも。

無策（後書き）

感想や評価などお待ちしています。よろしくお願いします。

無策（2）（前書き）

進歩のない文章ではありましけど、楽しんで頂けたら幸いです。
Ｐ．Ｓ．ＰＶ３００００越えました。皆さんのおかげでしかありません！本当にありがとうございます。

無策（2）

天津さんと目当ての映画「ライオン・ベジタリアン」を見た後、そのまま近くの喫茶店でお茶をすることになった。僕はレモンティー、天津さんはブラックコーヒーを頼む。しばらくして運ばれてきたレモンティーに、僕はガムシロップを入れる。

「あなた、高校生にもなってガムシロップなんか使うの？まだまだ子供ね。」

天津さんにおもいっきり見下された。…見た目が中学生な天津さんに言われると何か違和感が…

「告君麗梨、あなた今私に対して失礼なこと考えてなかった？」

エスパー！？

「いや、そんなことないですよ？」

そんなことありますけどね。

「…まぁいいわ。それにしてもつまらない映画だったわね～。」

心底つまらなさそうに天津さんはため息をつく。「ライオン・ベジタリアン」はその名の通り、野菜しか食べないライオンの物語だ。肉を食べるか野菜を食べるか、それだけの違いで食物連鎖の輪が崩壊し、地球規模の災害になってしまう物語。僕はこのライオンに対して、吐き気のするような仲間意識を抱いてしまった。当たり前の事が出来ない。そのせいでライオンは世界を壊し、僕は僕自身を壊す。どちらも同じことだ。世界の崩壊は僕自身の崩壊であるし、僕自身の崩壊は世界の崩壊でもある。ここで言う世界とは、僕自身の世界のことではあるけれど。

「それに、あそこのムササビのところも解りづらいし…ってあんた聞いてるの？」

「え？」

どうやらぼっとしていたようだ。

「まさか、聞いてなかったの？」

…またしても嫌な予感。
「いやいや、そんな事はないですよ？天津さんの言葉なら、一言一句もらさず聞いてました！」
「……。」
疑わしそうな目で見てくる天津さん。
「ホントですってば！さっきは、ええと…そう、ライオン・ベジタリアンがつまらないって話でしたよね！？」
もう必死な僕。何でこんなに必死になっているのかは、僕自身にすら分からない。
「…分かったわよ、もういいわ。」
呆れたようにため息をつく天津さん。…助かった。
「ところで、告君麗梨。」…どうやら僕に休みは与えられないみたいだ。
「何ですか、天津さん？」「何よ、その嫌そうな顔。…まぁいいわ。あなたって、何で後輩の私に敬語なの？」
また何でそんな事を聞くのだろう？というか、天津さんってそもそも後輩だったっけ…。すっかり忘れてた。
「いや、特に理由はありませんね。僕は誰にだって敬語です。」
「この前あの綺麗な先輩を下の名前で呼び捨てにしてたじゃない！」
その時、天津さんはまるで焦っているかのように少し大きめの声で僕に言ってきた。僕を睨んでいるわけでもないのに、少しの殺気と、僅かな罪悪感を感じる。それに、何故だろうか、僕は今恐れている。何に対してなのかは解らないけど、でも、恐れているのは確かだ。
「媛姫のことですか？それは別に、ただ単にそう呼ぶように頼まれたからであって、その…。」
しどろもどろになりながら、天津さんに説明する。
「へぇ…それなら私もそうするわ。」
「へ？」
つまりは、天津さんも僕と同じように敬語で話し掛けてくるということだろうか。

「だから…私のことも、名前で呼んで。」
ああなんだ、名前のことか。
「構いませんよ、えっと…藍満。」
その時だった。天津さんの…いや、藍満の顔はみるみる赤くなり、体は強ばり、頭からは湯気が出た。…トーマ〇？
「大丈夫ですか、藍満。」「ひゃぁ！」
何か驚かれました！？呼び捨てにしろって言ったのは藍満なのに…。
「心の準備も終わってないのに、私の名前を呼ばないで！」
「自分がめちゃくちゃなこと言ってるの分かってますか…？」
泣きそう…。
「もういいわ、帰りましょう！」
半ば投げ遣りな対応に見えなくもない…。
「だいたい、あんたみたいなガキを何でこんな大人でお洒落な私が好きになるわけ…？」
ぶつぶつと呟く藍満。
「何か言いました？」
「何でもないわよ！」
叫ばれた…。周りの視線が痛い…。
「それじゃ、行きましょうか…っと、その前に。」
「？まだ何かあるの？子供っぽいあなたは、お子様ランチのおまけでも忘れたの？」
よく解らない敵意をむき出しにして僕を見下す藍満。「いや、違いますけど…その、ブラックコーヒー、藍満はいつ飲むのかなって。」
僕が指差した机の上にはまだ一口も飲まれていないブラックコーヒー。
「藍満ってもしかして苦いのが苦t「うるさい！」」また分けも分からず藍満に殴られた…。

その帰り道、今度は手も繋いでないけれど、それでもたくさん話をした。学校のこと、部活のこと…。

そうやって話をしているうちに、いつの間にかもう学校の校門の前だった。これで彼女とはお別れだ。
「今日は楽しかったですよ。」
「私もまぁまぁ楽しかったわね。」
うん、藍満も満足したみたいだし、この辺でお開きに…。
「天津ぅ…。」
ふっと、聞き覚えのある声がした。以前、天津さんと二人の時にあった…
「せ、先輩…。」
陸上部の部長だった。

無策（2）（後書き）

明日も投稿する予定です。それで無策は終了になります。ダラダラと長い話にしてしまって、申し訳ないです…。

無策（3）（前書き）

はい、大分遅れてしまい、申し訳ありませんでした…。

無策（3）

僕の思想は矛盾する。僕の思考は矛盾する。そんなのは当たり前の話だ。だって、僕はいつだって自分の思考を後付けして、自分自身を納得させて、自分自身を騙くらかしているのだから。しかも後付けする理由が、自分を正当化するためじゃないから余計に性質が悪い。何せ改悪しているのだから。

このように僕はいつだって矛盾しているけれど、しかしだからと言って、今の後付け思考をやめることはないだろう。矛盾していようが、その時僕が最も出したくない解がでるよりはマシだから。僕には正解するよりも、誤解するほうが居心地がいいから。僕には僕自身が正解していると誤解するほうが都合がいいから。答えはない、なんてカッコいいものではなく、答えはいらないという子供の単なる駄々こねだ。つまりは僕はどうしようもなく間違えた、いや、どうしようもなく誤り方を間違えた、どうしようもなく謝り方を間違えた存在なのだと、そういうことだ。

陸上部部長。藍満にとっては部活の先輩であり、僕にとってはただの先輩に当たる。

「天津…。部活をサボってデートだなんて、ずいぶん偉くなったものね。」

「……。」

押し黙る藍満。日曜は一年生は部活はないはずだし、そもそもデートじゃない。そうはっきり言えばいいのに。

「黙ってないでなんか言いなよ天津。何ならそこの可哀想な彼氏君でもいいよ…って、あんたはあの時の…。」

どうやら僕の存在には今気付いたようだ。

「どうもお久しぶりです、先輩。」

取り敢えず挨拶をしておく。友好な人間関係は挨拶から始まるって

この前本にもテレビにも…
「あんた何でまだいんの？うざいから消えてくんない？」
僕はもう二度とメディアを信じない。
「ていうかあんた、生徒会に入るんだって？アハハッこのゴミな天津に好かれるようなクズなあんたが、本当にバカみたいね。」
心底可笑しそうに笑う先輩。その顔は見てるだけで不快になるような、毒々しい所謂嫌な笑顔だった。
「先輩、この人のことを悪く言うのはやめてください…。」
いつもの姿からは想像もつかないような、想像を絶するような声で、恐る恐る、おどろおどろしく、戦々恐々といった様子で、それでも僕を、こんな僕ごときを弁護する藍満。
「あら、あたしあなたに喋るなんていう大層なことを許したかしら？」
そう言って先輩は、藍満の想いを踏み躙る。いや、触れてすらいない。おそらくは見てすらいないだろう。触りたくもなければ、見る価値もないと言わんばかりの目を藍満に向ける。そう、まるで僕が僕自身に向けている目のように。
そう思った途端に、ふつふつとよく分からない感情が渦巻いてきた。熱く、煮えたぎるような…焦り？
「先輩、もういいでしょう。何でいちいち絡むんですか。」
またしても、自分の感情に耐えられなくなって、口を出してしまった。先輩と藍満の問題なのに。僕は部外者であって、妨害者でしかないのに。僕のくだらない情念に、僕の取るに足らない感情に、どうして二人の問題に口を出す権利があるのだろうか。いちいち絡むのは僕の方だ。
「何、あなたまた口を出すの？何の関係もないあなたに、一体私に何を言う権利があるのよ。」
まったくだ。そもそも僕には何一つとして権利と呼べるようなものは存在しない。
「でも先輩、あなたに何の権利があって天津さんをけなすんですか

？」
じゃあ僕自身、何の権利があって生きているのだろう。
「権利？こいつをけなす権利なんて誰でもが持っているわ。あなたでさえもね。」
権利？そんなのは持ち合わせている分けないだろう。「なるほど。では先輩はその権利を得るためにどんな義務を果たしているんですか？」
権利もないのにどうして生きているのだろう。
「義務ぅ？あんた真剣な顔してバカじゃないの？」
それは僕が権利を無視して生きる権利を手に入れているからだろう。嫌気がさすような、吐き気がするような代償を払い続けているから。
「分かりました。もういいです。天津さん、行きましょうか。」
僕は強引に藍満のてを引いていく。
「え、ちょっと…。」
あわてた様子で転びそうになる藍満。彼女の手は冷えきっていた。
「あら、逃げるの？止めはしないけど。」
先輩は楽しそうに笑いながら言う。
「逃げるといわれても、そもそも僕は戦っていたつもりはないですけどね。」
少なくともあなたとは。
「フン、まぁいいわ。さようなら、ゴミクズカップルさん。」
僕達は先輩に背を向けた。

「……。」
「……。」
お互いにあれから無言だ。気まずいかもしれないけど、今の僕には丁度いい。
「あのさ…告君…麗梨。」ふいに、藍満が僕の名前をささやくように、呟くように僕の名前を呼んだ。
「何ですか、藍満？」

「あんたは私を助けようとしたの？だったら…。」
余計なお世話よ、と僕が聞き取れるギリギリの音量で、それでも助けを求めるように、僕を見上げてくる。僕は藍満を助けようとしたのか？いや、そんなはずがない。だって少なくとも、あの時沸き上がった感情に、藍満のことなど全く入っていなかった。藍満のことを全く考慮しない、自分勝手な行動。
でも違う。今の藍満が求めているのはそんな言葉じゃない。
「違いますよ。僕は藍満を助けたかったわけではありません。僕は僕を助けたかったんです。藍満が苦しんでるのを見ているだけだなんて、僕も苦しいじゃないですか。」
嘘吐きめ。本当はそんなこと欠片も思ってないくせに。苦しんでるのを見ていられなかっただと？そもそもお前に藍満の感情を理解できていたのかよ。人間以下のお前にさ。自分が苦しかったからだと？つまりお前が苦しまなきゃ誰が苦しんでも構わないと、そういうことだろ？ホント、ものは言い様だな。
藍満は茫然としたあと、何も言わずに走り去った。
僕には何も言えない。自らの計画性のなさを呪いながら。無限に無意味で無鉄砲でありながら無難な僕の無策さに呆れながら。

無策（3）（後書き）

次回はシリアスな番外編になりそうです。
感想評価などお待ちしています。

番外編（1）（前書き）

今回は鷹島視点です。鷹島君はある意味この物語のもう一人の主人公。これからも主に番外編という形で登場してきます。
それでは、未熟な作者の書いた未熟な話ですが、楽しんで頂ければ幸いです。

番外編（1）

告君麗梨。俺が知る中で最もぶっ飛んだ人間であり、最高の親友だ。真面目で、正直で、実直で、素直で、優しくて。しかしいざというときのノリは最高…とはいってもあいつのノリが最高になった時なんか、あいつとは小学生からの仲だが二回しか見たことない。一回は小学生の頃の六年生へのリベンジマッチ。二回目は中学の時の媛姫絡みの一件。前者は最高に楽しかったのにあまり覚えていないが、後者は忘れたくても忘れられない、かなり大きな事件だった。思えばあの頃から媛姫は麗梨のことを想っていたんじゃなかったっけか。まぁそんなことは今はどうでもいい。それよりも問題なのはあいつのぶっ飛び様だ。さて、俺は中学の頃あいつには好意を理解できないんじゃないかという仮説をたてた。で、それ以降のあいつとの会話やあいつの行動から検証してみた結果がでたのはほんの1ヶ月程前だ。その結果というのが俺としては喜ばしくないものだったのだが。

結果だけ先に言えば、「ビンゴ」だった。

実はこの推測、俺としては外れてほしいものだった。正直、この結果が出たときはゾッとしたぜ。つまりあいつは、少なくとも中学生の頃からは一度として好意を感じたことはないのだ。ここでいう好意とは、何も恋愛感情に限定したものではない。例えばあいつが誰かを助けて、そのお礼を言われたとする。もちろんそのお礼の中にはある程度の好意が含まれているだろう…というか、お礼とは好意そのものであり、厚意そのものであると思う。

しかしあいつはそれを好意として受け取れていないのだ。そんな状態で、あいつはあの性格をしてやがる。「誰も自分のことを好きにならないこと」が前提の世界で、平気な顔して誰かを助ける。だから中学では同年代からかなり頼りにされていたし、信頼もされていた。

でもあいつにはそれが分からない。いや、正確に言えば、信頼されていることが分かっていても、その意味が理解できていない。つまりはただひたすらに見返りがないのだ。それでも誰かの頼みをいつも聞いて、それを完璧にこなしてくるのがあいつだった。
はっきり言って俺には無理だ。別に常に見返りを求めて動いているつもりはないが、そんな世界でも俺は麗梨の様に出来るかと問われれば、答えに詰まる。というより、無理だろうというのは推測できる。
また、麗梨は好意だけが全く理解できないだけで、空気を読む能力はかなり高い。そのばの空気を正確かつ迅速に読み取り、今自分がするべきことを最速で演算する。さらに頭もキレる。相反するふたつの願いを同時に叶えるような男だ。もちろん完璧ではないが、しかしそんなこと普通出来るか？
だが、麗梨もそろそろ限界だということは容易に想像できる。特に月見と出会ってからは…ってか、その月見との出会いも俺が仕組んだんだけどな。月見のクラスメイトに根回し、麗梨と俺以外の生徒が居なくなるように、麗梨を足止めしたり。まぁその後のことは俺は何もしてないけどな。あいつらなら一度出会ってしまえば、俺が手を下す迄もない。
俺が月見を見つけたのが6月。大分時間がかかったが、下調べや下準備を済ませなければならなかったので、まぁまぁの結果といったところか。
月見は麗梨に限りなく近い。重傷度で言えば麗梨の方が上だがな。…何の自慢にもならない。んで、その二人を逢わせて変化を起こす作戦だったわけだ。月見は麗梨程壊れてなかったし、しかし麗梨に近くはあったので、麗梨と月見とでちゃんとしたコミュニケーションがとれるんじゃないかと期待したんだ。似た者同士ならば、少なくとも俺たちよりは可能性はあるだろうし。
だが、はっきり言ってこの作戦は失敗だった。麗梨の傷は広がっちまったし、何よりその代わりに得たものがあまりにも小さい。俺の

目的―あいつに俺たちと同じ、普通の世界を見せてやること―を達成するには、まだまだ道程は遠い。それでも、まだ諦めるわけにはいかない。ここで諦めたら、あいつは―。

「ああ、そうか。わかった。それじゃ。」
学校の裏門。俺は携帯を切り、ポケットにしまう。
「首尾は上々細工は粒粒、今回は完璧にやれるだろ。」
不覚にも自分でも分かるほどに顔がにやけてしまった。何せ今回はかなり早い段階で作戦の用意が完了したのだから。
とは言っても俺一人の力じゃない。もう一人の協力者である霧断聖美のおかげだ。その霧断聖美…この学校の生徒会長であり、俺の彼女だったりする。はっきり言おう。聖美は俺には勿体ない程頼もしくて美しい。まぁそんな俺のとてつもなくどうでもいい惚気話はさておき、さっきも言った通り、彼女は協力者だ。麗梨を生徒会に引き入れるためのな。
正直、今の麗梨を意味もなく生徒会に入れるのは危険だが、しかし生徒会にはあの娘がいる。もしかしたら、あの娘なら麗梨の何かを改善してくれるかもしれない。あの娘はある意味、麗梨とは真逆の存在だからな。
俺は一筋の希望を胸に、学校を後にした。

番外編（1）（後書き）

次回からは新しいヒロインの「彼女」が登場します。なんとか来週中には投稿できるよう頑張りますので、その際はよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2409i/

無題

2010年10月10日01時38分発行